

区 分	課 程
--------	--------

(論文 様式)

海外派遣サッカー指導者に関する心理学的研究：
異文化におけるコーチングの視点から

スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻

学 籍 番 号 212D08 氏 名 松 山 博 明

研 究 指 導 土 屋 裕 睦 教 授

序 章 本研究の背景と意義

1. 1. 研究の背景

1. 2. 本研究におけるコーチングの用語の定義と概念

1. 3. 量的研究と質的研究

1. 4. トレーニングの定義と分類

1. 5. 本研究の目的

1. 6. 本研究の構成

第 2 章 ブータンサッカーのコーチングによる育成強化に関する実態調査

2. 1. はじめに

2. 2. 方法

2. 2. 1. 分析対象となった指導者と実践活動

2. 2. 2. 分類方法

2. 2. 3. 評価基準

2. 2. 4. 試合記録と分析方法

2. 3. 結果

2. 3. 1. 年間スケジュール

2. 3. 2. 分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ

2.3.3. 準備期間中での課題

2.3.4. 試合期間中での課題

2.4. 考察

2.4.1. 年間スケジュール

2.4.2. 分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ

2.4.3. 準備期間中での課題

2.4.4. 試合期間中での課題

2.5. まとめ

第3章 海外派遣サッカー指導におけるコーチング環境の実態調査

3.1. はじめに

3.2. 方法

3.2.1. 調査内容

3.2.2. 調査期間

3.2.3. 調査方法

3.2.4. 統計処理

3.3. 結果

3.3.1. コーチング環境

3.3.2. 指導者による選手の競技力(技術・戦術)比率

3.3.3. 指導者による選手の競技力評価

3.4. 考察

3.4.1. コーチング環境

3.4.2. 指導者による選手の競技力(技術・戦術)比率

3.4.3. 指導者による選手の競技力評価

3.5. まとめ

第4章 海外派遣サッカー指導者の異文化体験

とレジリエンス

4.1. はじめに

4.2. 方法

4.2.1. 対象指導者

4.2.2. データ収集

4.2.3. 複線経路・等至性モデル(TEM)の概念説明と本研究における位置づけ

4.3. 結果

4.3.1. 事例の提示

4.3.2. TEM図の作成

4.4. 考察

4.4.1. 決断の時期

- 4.4.2. 異文化適応と挑戦の時期
- 4.4.3. 葛藤と試行錯誤の時期
- 4.4.4. 振り返りと新たな目標の時期
- 4.5. まとめ

第5章 総括と展望

- 5.1. 本研究のまとめ
- 5.2. 量的研究と質的研究の有用性
- 5.3. 海外派遣サッカー指導者の有用性
- 5.4. コーチング環境への提言
- 5.5. 本研究の限界と今後の課題
 - 5.5.1. 指導者派遣の検討
 - 5.5.2. 赴任後の日本での指導先の検討

注

引用文献

序 章

本研究の意義と問題の背景

1.1. 研究の背景

公益財団法人 日本オリンピック委員会 (Japanese Olympic Committee: 以下, JOC とする) は, 2000 年のスポーツ振興基本計画に基づいて, 2001 年に「JOC ゴールドプラン」を策定し, 具体的な施策に取り組んできた (JOC, 2014). 「JOC ゴールドプラン」とは, ジュニア期からの組織的, 計画的な選手育成や強化指定選手の一貫指導, 新しい指導法の指導者への教授などにより, オリンピックのメダル獲得数の倍増を目指す計画のことである. その成果として, 2014 年ロンドンオリンピック本大会での日本代表選手団は総勢 518 名で編成され, 4 競技 175 種目に参加し, 金 7, 銀 14, 銅 17 という合計 38 種目でメダルを獲得した. これは, メダル獲得総数, 入賞総数ともに過去最多であり, JOC が進めてきた施策が一定の成果を上げていることを示していると言える.

現在, 2016 年夏季オリンピックで金メダル数世界トップ 3 を目指す目標を掲げ, 選手強化を推進している. こうした選手の強化を推進していく中で, 指導者育成ならびに強化は必要不可欠である. 文部科学省 (2013) は, 多くの諸外国出身の指導者が我が国で活動している一方, 我が国で育成された指導者のうち諸外国で活躍している者の数はまだ少ないと考えられ, これらを推進していく取組が必要であると述べている. したがって, 急速にグローバル化が進む, 現代の日本のスポーツ界においては, より多様性に柔軟に対応し, 国籍を超えて活躍する人材がますます必要とされる.

JOC の正加盟団体である公益財団法人日本サッカー協会 (Japan Football Association: 以下, JFA とする) も, 積極的な国際交流を行っている. JFA が行っているアジア貢献事業では, アジアサッカー発展のために, 人材の活発な交流を行う指導者や審判員を養成するための指導者プログラムを提供し, アジア間での共存共栄を目指している (JFA, 2013a).

アジア貢献事業は 1999 年 12 月, マカオ協会からの要請を受け, 代表およびユースチームの監督として初めて上田栄治氏をマカオに派遣した (JFA, 2013a). それ以降, 多くの指導者がアジアの様々な国や地域で代表監督や育成コーチ, 審判インストラクターなどを務めた. その実績として, 2015 年 2 月までに, アジア諸国に代表 (ユース年代代表チームを含む) 監督やユース育成指導者を 52 名のべ 24 か国のアジア諸国へ派遣してきた (JFA, online).

しかし, 赴任した海外派遣サッカー指導者の実際の現状は過酷である. 派遣された指導者の中には, アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者募集の情報を知り, 現地の情報はほとんど持たないまま, むしろ「今は何も必要はない. やれることを精一杯やるだけだ」と意気揚々と現地入りする指導者も少なくない. しかし, いざ関わってみる

と、国内では経験できない国際試合を経験出来るという反面、それ以上にコーチング環境などのさまざまな問題、課題は、予想をはるかに上回っている。

コーチング環境での施設面では、日本と比較した場合、大きな問題や課題が多く報告されている。例えば、2007年からチャイニーズ・台北に赴任した今井敏明氏は、サッカー専用競技場のピッチ状態が非常に悪く、セキュリティにも非常に問題があると述べている(JFA, 2007a)。また、2012年からブータン王国(以下:ブータンとする)代表監督兼アカデミーヘッドコーチに赴任した小原一典氏は、アカデミーの施設にシャワーがなく、水道水もよく止まる。そのため選手は、近くの川で洗濯したり、体を洗ったりする状況であると述べている(JFA, 2013b)。したがって、サッカー場の施設などの環境も決して最適な状態とは言えないのが現状である。

育成システムにおいても、2012年からラオス人民民主共和国(以下:ラオスとする)監督に赴任した木村浩吉氏は、育成年代のクラブづくりとそれに伴う指導者養成と育成年代のゲーム環境を構築することが急務であると述べている(JFA, 2014a)。また、2012年からチャイニーズ・台北ユース育成統括兼U-13・18代表監督に赴任した黒田和生氏は、中学、高校にクラブチームはなく、アジア貢献事業の活動のみである。このことから、体育班と言われる一部の限られた人間だけが競技をしている現状であると述べている(JFA, 2013c)。2012年からブータン代表監督兼アカデミーヘッドコーチに赴任した小原一典氏は、アカデミー以外で定期的にトレーニングを行うユースチームが存在しないと述べている(JFA, 2013b)。したがって、コーチング環境が整っていない国も多く存在し、育成年代のシステムを整えていくことが急務であると考えられる。

選手の競技能力の心理面では、2010年からカンボジア王国(以下:カンボジアとする)U-16代表監督兼ユースディレクターに赴任した吉岡大介氏によると、選手は、代表チームへ選出された喜びよりも、自信をすでになくしていた。そのため明らかに他国と戦うことを恐れていたと述べている(JFA, 2011a)。また、2013年から東ティモール民主共和国(以下:東ティモールとする)U-16兼U-19代表監督に赴任した築館範男氏は、長期プランが持てず、責任感が希薄で、約束事やアポイントは成立しない。このことから、練習の時間厳守と参加できないときは必ず事前連絡をさせると述べている(JFA, onle)。2012年からチャイニーズ・台北ユース育成統括兼U-13・18代表監督に赴任した黒田和生氏によると、指示を待っている、やらされている状態であったと述べている(JFA, 2013c)。したがって、選手は、自分の判断で動く習慣が少なく、指導者に言われてから動く状況が多く見受けられる。

選手の技術, 戦術面においても, 2010 年からブータン代表監督兼アカデミーヘッドコーチに赴任した松山ら (2014) は, 育成年代で技術や戦術面が習得されていなかったと述べている. しかしながら, ラオス技術委員長に赴任した関口潔氏は, 日本人よりもレベルが低いとしながらも, 動きが俊敏でボールタッチが繊細であると述べている (JFA, 2014b). このことから, ラオスの選手は, 指導の仕方によっては, 著しく成長出来る可能性を秘めていることが伺える. したがって, 海外派遣サッカー指導者は, 日本と全く違う過酷で厳しいコーチング環境下において, 赴任先の国の競技力向上のために指導していく必要がある.

1.2. 本研究におけるコーチングの用語の定義と概念

英語の名詞 coach は, Oxford English Dictionary によると, 16 世紀頃から使われた旅客馬車の意味から派生し, 1885 年に初めてボート競技の指導者を指す学生用語として用いられた. その後スポーツ競技一般の指導者の意味として使われるようになったとされている (Simpson & Weiner, 1989).

現代英語の coaching には, スポーツに必要なスキルを個人またはチームに教える過程という意味がある. もう一つは, 重要な試験や特定の状況においてどう振る舞うかの準備を支援する過程 (Summers, 2009) という意味がある. また, 広辞苑では, コーチングは, ①コーチすること. 指導, 助言すること. ②本人が自ら考え行動する能力をコーチが対話を通して引き出す指導術と説明されている (新村, 2008).

コーチの認定組織である国際コーチ連盟 (International Coach Federation: 以下, ICF とする) では, コーチングとは, 思考を刺激し続ける創造的なプロセスを通して, クライアントが自身の可能性を公私において最大化させるように, コーチとクライアントのパートナー関係を築くことであるとしている (国際コーチ連盟日本支部, online). 文部科学省は, コーチングとは, 競技やチームを育成し, 目標達成のために最大限にサポートをすること (文部科学省, 2013) と定義づけている.

また, コーチングの促進的アプローチとしての見解から, 名テニスプレーヤーのティム・ギャルウェイによるとコーチングは, 個人の潜在能力を解き放って, 彼ら自身が最大限に力を発揮出来るようにするものである. それは, 教えるというより彼らが学ぶことを助けるものであると述べている (Whitmore, 1992). Downey (1999) は, コーチングとは, 他者の行動, 学習そして発達を促進させる技法であるとしている. 一方, 指示的アプローチからの見解では, コーチングとは, 教え指示することで技能を即時的に高めて発展させることに直接的に

関わっているとしている (Parsloe, 1995).

上記に述べたコーチング概念の多くは、スポーツや運動競技にその起源を持っている。指導者と選手の間にある関係の質の重要性はスポーツ心理学の文献でも指摘されている (堀, 2009)。また、ラサール大のジョン・ジアニーニ (2012) も、スポーツ心理学の理論をコーチングに活用したと述べている。

このことから、心理学的観点からも、コーチングは、選手との信頼関係を築きあげることが競技の上達には必要不可欠である。また、指導者自身が競技における知識を真摯に学び、取り組むことが重要になる。したがって、海外派遣サッカー指導者においても、赴任先の選手や現地スタッフとの信頼関係を構築し、指導者自身が競技における知識を真摯に学び、取り組むことが重要であると考えられる。

1.3. 量的研究と質的研究

海外派遣サッカー指導者の異文化におけるコーチングの視点から検討していくにあたって、研究手法としては量的研究と質的研究の両方が考えられる。

量的研究は、主に「数値」を使い、複数のサンプルからデータを収集し、事象を数量化し、統計的に分析する研究方法である。

サッカー指導に関する量的な研究では、永都ら (1991) のサッカーのトップクラスに位置している旧西ドイツ及び日本の指導者、少年選手 (10 歳～12 歳) を比較検討し、実際の指導場面に役立たせることを目的とした質問紙の調査による研究がある。また、李ら (2006) の育成年代のサッカー指導者に関する資質の日本と韓国の比較検討し、日韓のサッカーレベル向上を目的とした質問紙の調査による研究がある。したがって、ブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために、FIFA ランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行うために、質問紙の調査による研究は、量的研究が有効的である。

一方、質的研究は、インタビューや参与観察によって得られた言語データを利用し、人や社会を記述する研究である (佐藤, 2008)。また、事例研究はケースの分析から普遍的な法則性を見出そうとする手法であり、実践で多く採用されている。サッカーの実践活動に関する事例研究では、曾根 (2008) が、シリア U-17 代表チームのアシスタントコーチとして大会に臨むに当たって、大会前の約 1 ヶ月に渡る「試合全般に対する準備」と「個々の試合に対する準備」が戦略や戦術的活動において影響することを明らかにした研究がある。また、内藤ら (2013) が、筆者自身の体験を交えながら、イングランドのユース育成の内情を指導体制や運営実態から検証した研究がある。したがって、海外派遣サッカー指導者のブータンにおけるコーチング記録をもとに、コーチング環境の実態を明らかにすることを目的とし

た研究は、質的な事例的研究による研究手法が有効的である。

また、質的研究の中で、サッカー指導に関するインタビューや参与観察によって得られた研究は、堀野(2009)によるトップレベルの指導者のコーチングモデルを分析し、検討するために講演とインタビューから、コーチングに関する要因を分析した研究がある。また、北村(2004)のブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として、教育情報の視点からインタビュー調査による研究がある。したがって、海外派遣サッカー指導者の心理的変容のプロセスを把握するために、インタビュー調査による質的研究が有効的である。

以上のことから、量的研究と質的研究の両方の利点を生かした研究方法を選択し、研究の課題を立証していく。

1.4. トレーニングの定義と分類

海外派遣サッカー指導者のコーチングに関する研究を進めていくにあたって、まず指導現場での実践活動であるコーチング環境を把握することが非常に重要である。そのために、まず指導現場で行われているトレーニングに着目し、トレーニングメニューの基準作成を行うこととした。松山ら(2013)は、ブータン王国サッカーのコーチングに関する調査研究において、U-19 代表チームにおける強化トレーニング内容に着目し、日々のトレーニングを項目ごとの時間比率を分析した。また、松山ら(2015a)は、プロサッカーチームの2010年と2011年のシーズン成績の結果をもとに上昇群・下降群とに分類し、トレーニング内容の時間比率を比較検討した研究を行った。

これらの研究では、日々のトレーニング内容を J. ヴァインエック(2002)にならい、ウォーミングアップ、技術、戦術、フィジカル、ゲームの5項目に分類した。次に、分類した5項目の枠組みの中に21種類に細分化したトレーニングメニューを作成した(松山ら, 2015a)。トレーニングメニューの定義と基準は、次のとおりである(Figure1-1)。

ウォーミングアップとは、トレーニング中でのウォーミングアップ全般とし、トレーニング前に最適な状態を作り出すための活動とした(エリッヒ・バイヤー, 1993)。技術とは、競技に関わる正確で効率の良い動きの技術構造である(テューダー・ボンパ, 2006)。また、個人での技術・戦術を結ぶものと考えられ(JFA, 2007b)、個人技術、個人の戦術・対人を技術面とした。フィジカルとは、サッカーに特化して行動するときの体力のことである(長澤, 2007)。そのため、アジリティ、筋力トレーニング、体幹、全身持久、筋持久、ボールを使ったフィジカルをフィジカル面とした。戦術とは、ゲームおよびトレーニング構想の基礎となるものである(會田, 1994)。そのため、ポジション別トレーニング、シュートトレーニング、戦術面の対人でのゴールあり、戦術面の対人ゴールなし、

フリートレーニング, 紅白戦, フォーメーション, セットプレーを戦術面とした。ゲームは, 前後半の合計 90 分間行われたものである。そのため, 練習ゲームでのウォーミングアップ, 練習ゲーム, 公式戦でのウォーミングアップおよび公式戦とした。

5項目	ウォーミングアップ	技術面	フィジカル面	戦術面	ゲーム
21項目	ウォーミングアップ	個人技術	アジリティ	シュート	練習ゲームでのウォーミングアップ
		個人の戦術・対人	筋カトレニング	ポジション別トレーニング	練習ゲーム
			体幹	対人でのゴールあり	公式戦でのウォーミングアップ
			全身持久	対人でのゴールなし	公式戦
			筋持久	フリートレーニング	
			ボールを使ったフィジカル	紅白戦	
				フォーメーション	
				セットプレー	

Figure1-1 各トレーニングメニューの分類

しかしながら, 日々のトレーニングだけでなく, 国際大会やコーチング環境を検討する場合, 松原ら(2006)は, フランスの青少年育成システムの年間計画の方針と目標の中で技術, 戦術, フィジカル, メンタルの4つに分類したと述べている。また, 加藤ら(1994)は, 国際大会を行ううえで必要な要素として, 技術, 戦術, 体力, 心理の4つを挙げている。このことから, 選手の競技能力の実態調査を検討する場合, 5項目に分類したトレーニングメニューの中から, 試合期間中での課題として, 技術, 戦術, 体力, 心理面の4項目に分類した。

次に, コーチング環境の実態全体を検討する場合, JFA(2010a)は, アジアサッカー連盟(Asian Football Federation:以下, AFCとする)主催のアジアカップカタール2011や日本代表チームの選手選考, トレーニング期間の在り方について述べている。また, JFA(2011b)は, U-17日本代表チーム・メキシコ遠征でも, 移動距離や時間, 時差環境適応に関する調整について述べている。このことから, 準備期間中での課題として, 選考, トレーニング期間, 移動, 調整の4項目に分類した。

1.5. 本研究の目的

アジア貢献事業は, アジアサッカー発展のために積極的な国際交流を行っている。また, 人材の活発な交流を行うために指導者や審判員を養成するための指導者プログラムを提供し, アジア間での共存共栄を目指している(JFA, 2013a)。しかしながら, アジア貢献事業の

海外派遣サッカー指導者は、日本と全く違う過酷で厳しいコーチング環境下において、指導していく必要がある。

こうした、海外派遣サッカー指導者の実態を調査する有用性が示唆されているにもかかわらず(曾根, 2008), コーチング環境の実態や指導者が体験する異文化での心理的変容過程を探求する研究はいまだ行われていない。また、代表チームレベルのコーチング環境に関する研究は、あまり存在しないとしている(松本, 2011)。

そこで、本研究では、海外派遣サッカー指導者の実態を明らかにすることを目的とした。具体的にはコーチング環境の特徴を明らかにすることと、同時にそこで指導者が体験する異文化での心理的変容過程を探求することを研究課題とした。

1.6. 本研究の構成

本研究の構成は、5章から構成される。各章の研究テーマをFigure1-2に示した。

序章では、コーチングを定義し、トレーニングメニューの分類法と準備期間中および試合期間中でのコーチング項目を設定した。これらの研究課題にアプローチするため、本研究では量的および質的研究法を採用することとした。

第2章では海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため、ブータンにおけるコーチング記録をもとに、コーチング環境の実態を明らかにすることを目的とした。

第3章では、ブータン以外の実態を把握するために、FIFAランキング上位・中位・下位別にコーチング環境および選手の競技能力の実態調査を行った。

第4章では、下位群による初めて海外に派遣されたサッカー指導者3名に対するインタビュー調査から、異文化体験を複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model:以下, TEMとする)によって可視化した。

第5章では、総括と展望から、本研究のまとめと量的および質的研究の有用性、提言を述べた。また、本研究の限界と今後の課題について検討した。

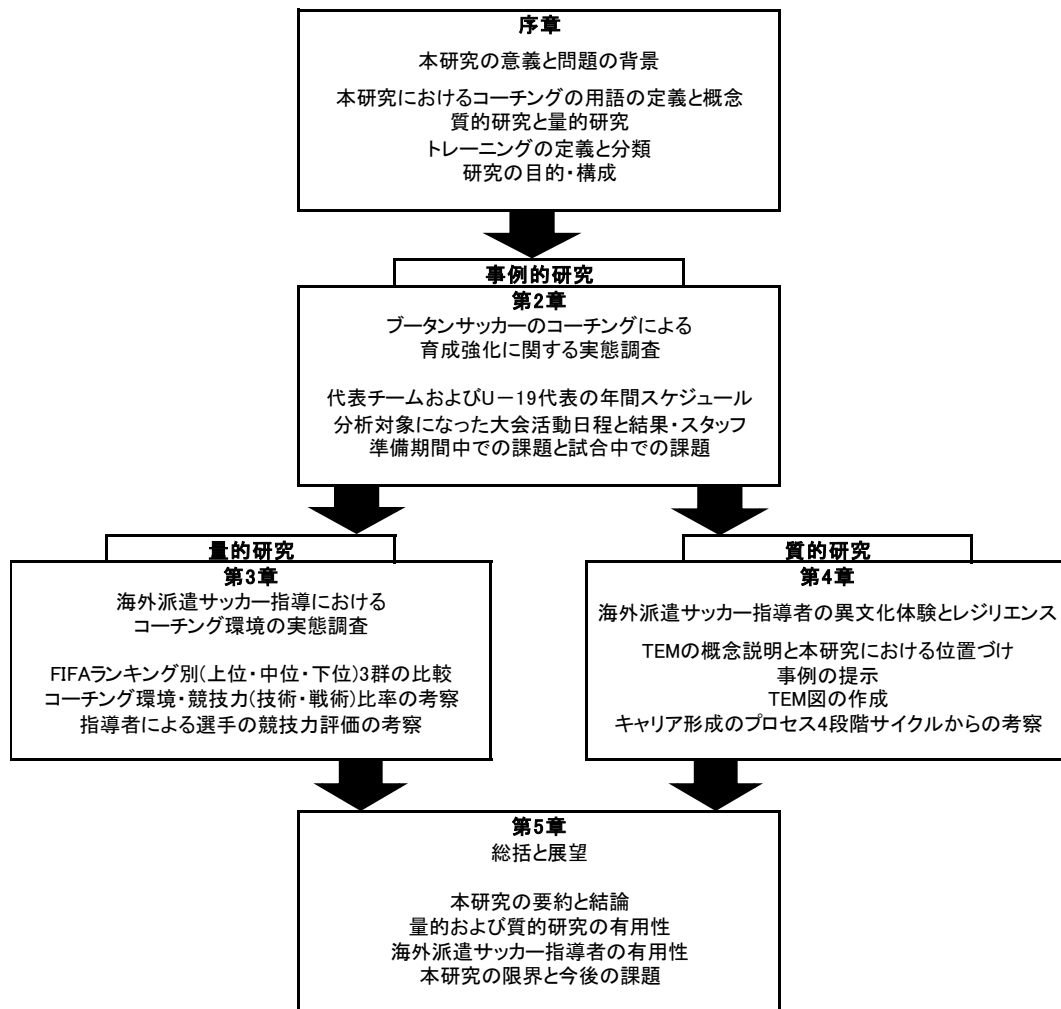


Figure1-2 本研究の構成

第 2 章

ブータンサッカーのコーチングによる 育成強化に関する実態調査

2.1.はじめに

日本スポーツ界でも外国人の監督やアスリートが在籍するプロチームや社会人チームが多く見られるようになってきた。また、日本人の監督が外国人の選手を指導することも多くなってきている。さらに、日本人の野球選手やサッカー選手などが欧米で活躍するようになり、欧米の指導者も、日本人の選手を指導する機会が増えているのは、明らかである(直井, 2010)。現在, 日本代表サッカー選手 23 名中 11 名が海外のクラブで活躍する事例が見られ, また, ロンドン五輪予選を戦った日本代表女子サッカー選手 20 名中 4 名が外国クラブに所属するようになった(高橋, 2012)。

一方, サッカー指導者においても, 2012 年から前日本代表監督の岡田武史氏が, 中国スーパーリーグ(中国サッカー1 部リーグ)の杭州緑城の監督に就任した(高橋, 2012)。現在, 韓国では, 代表のフィジカルコーチをしている池田誠剛氏(KRNEWS, online), ソウル FC のフィジカルコーチをしている菅野淳氏がいる(Sports navi, online)。また, タイリーグで指揮をとる日本人監督は, チョンブリ FC の和田昌裕氏, ナコンラチャシマーFC の神戸清雄氏, ランシット FC の丸山良明氏, タイ・ホンダ FC の滝雅美氏の 4 名となった(samurai×TPL, online)。このように選手のみならず, 日本人の指導者が海外でスポーツ労働者として職を得る事例がみられるようになった。

しかしながら, 我が国で育成されたスポーツにおける指導者のうち諸外国で活躍している者の数はまだ少ないと考えられ, これらを推進していく取組が必要である(文部科学省, 2013)。こうした文部科学省が推進する中で, JFA アジア貢献事業も, アジアサッカー発展のために人材の活発な交流を行っている。その一つにコーチや審判員を養成するための指導者プログラムを提供し, アジア間での共存共栄を目指している取り組みがある。2015年2月までに, アジア諸国に代表(ユース年代代表チームを含む)監督やユース育成指導者を 52 名のべ 24 か国のアジア諸国へ派遣されてきた(JFA, online)。こうして派遣された指導者の赴任先の経験や指導実践での成果, 課題は, 蓄積され新たなコーチングの活用性に引き継ぐことが重要と考えられる。これまでの先行研究として, シリア U-17 代表チームが大会に臨むに当たって「試合全般に対する準備」と「個々の試合に対する準備」が戦略, 戦術的活動において影響することを明らかにした研究(曾根, 2008)や田嶋(2001)の U-17 アジア予選世界大会に向けての経験的事実によって世界大会出場の結果へと導いた育成年代の事例がある。

しかしながら, アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者は, 日本と全く違う過酷で厳しいコーチング環境下において, 指導していく必要がある。こうした海外派遣サッカー指導者の実態を調査する

有用性が示唆されているにもかかわらず(曾根,2008),コーチング環境の実態に着目した研究は,いまだ行われていないのが現状である.また,代表チームレベルにおいてはあまり存在しないとしている(松本,2011).

そこで,本研究では,海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため,事例研究を行った.対象は海外派遣サッカー指導者1名であり,ブータンにおける約1年半にわたるコーチング記録をもとに,コーチング環境の実態を明らかにすることを目的とした.

2.2. 方法

2.2.1. 分析対象となった指導者と実践活動

対象は,海外派遣サッカー指導者1名であり,JFAの理事会で決定されたS級ライセンス(最上級のライセンス)を取得している指導者によって実施した.S級ライセンスとは,プロ選手の指導が出来る人材を養成すると同時に,日本の指導者のリーダーとなる人材を育成することを目的に取得するライセンスのことである(JFA,online).

代表チームの対象となった実践活動は,ガバナーズカップ,AFCチャレンジカップ,南アジアサッカー選手権の3大会であった.対象となった実践活動は,いずれもAFC公認の国際大会であり,規定やルールが統一されていたため,この3大会を対象とした.

1)ガバナーズカップ

ガバナーズカップは,インド北東部のシッキム州ガントク市で行われ,2010年10月21日1回戦インドのカメリア・ユナイテッドと対戦し,0-1で敗戦した.

2)AFCチャレンジカップ

AFCチャレンジカップは,ネパールでの本大会の前に予備予選がインド・グルガーオン市で行われ,アフガニスタン代表と対戦し,3月23日,第1戦目は0-3で敗戦した.3月25日,第2戦目も0-2で敗戦した(AFCチャレンジカップ2012予選大会,online).

3)南アジアサッカー選手権

南アジアサッカー選手権は,インド・デリー市で開催され,2グループに分かれてのリーグ戦を行い3戦全敗で予選敗退した.12月3日,第1戦目スリランカ代表と対戦し,0-3で敗戦した.12月5日,第2戦目インド代表と対戦し,0-5で敗戦した.第3戦目12月7日,アフガニスタン代表と対戦し,1-8で敗戦した(南アジアサッカー選手権2011,online).

U-19代表の対象となった実践活動は,2011年国内リーグ(以下:国内リーグとする),クウェート国外合宿,U-19アジア選手権の3つの実践活動を対象とした.2010年国内リーグに関しては,リーグ戦の

途中からの指導であったため、対象外とした。対象となった実践活動は、代表チーム同様、いずれも AFC 公認の規定やルールが統一されており、U-19 アジア選手権に向けての過程を把握するための主な対外試合であったため、この 3 つの実践活動を対象とした。

1) 国内リーグ

国内リーグは、7 月 10 日から 7 月 29 日までの間、7 チームで総当たりの 1 ステージ制のリーグ戦を行った。結果は、2 勝 1 分け 3 敗の 7 チーム中 5 位であった。第 1 戦目 7 月 10 日、ドゥルックポールと対戦し、2-1 で勝利した。第 2 戦目 7 月 14 日、イエゼンと対戦し、1-5 で敗戦した。第 3 戦目 7 月 18 日、ジムンドラと対戦し、1-2 で敗戦した。第 4 戦目 7 月 21 日、タンスポーツと対戦し、0-2 で敗戦した。第 5 戦目 7 月 24 日、ナンパーと対戦し、5-0 で勝利した。第 6 戦目 7 月 29 日、ドゥルックアトレティックスと対戦し、2-2 で引き分けた。

2) クウェート国外合宿

クウェート国外合宿は、2011 年 9 月 25 日から 10 月 23 日までの間、トレーニングと親善試合 5 試合を行った。結果は、1 勝 3 敗 1 分けであった。第 1 戦目 10 月 5 日、アル・アラビと対戦し、2-2 で引き分けた。第 2 戦目 10 月 9 日、タダ・モンと対戦し、2-1 で勝利した。第 3 戦目 10 月 12 日、ラチャーヤと対戦し、1-3 で敗戦した。第 4 戦目 10 月 16 日、クウェート・スポーツと対戦し、0-1 で敗戦した。第 5 戦目 7 月 24 日、サラビ・ハットと対戦し、1-2 で敗戦した。

3) U-19 アジア選手権

U-19 アジア選手権は、AFC 主催の 19 歳年代以下のアジア選手権大会である。この大会は、各組上位 2 チームと各組 3 位チームの中で最も成績が良いチーム（東西各 1 チーム）の計 16 チームが、2013 年の決勝大会に出場する。U-19 代表は、2011 年 10 月 25 日から 11 月 4 日まで、西アジア地区の開催地カタール・ドーハで行われた予選リーグに参加し、結果は、5 戦全敗で敗退した。第 1 戦目 10 月 25 日、カタール代表と対戦し、0-3 で敗戦した。第 2 戦目 10 月 27 日、タジキスタン代表と対戦し、0-6 で敗戦した。第 3 戦目 10 月 30 日、ヨルダン代表と対戦し、1-3 で敗戦した。第 4 戦目 11 月 1 日、バーレーン代表と対戦し、0-3 で敗戦した。第 5 戦目 11 月 4 日、クウェート代表と対戦し、0-1 で敗戦した。

2.2.2. 分類方法

分類の具体的方法として、コーチング環境の実態を明らかにするために代表チームおよび U-19 代表の年間スケジュールと分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ人数を調査した。また、大会における準備期間中での課題と試合期間中での課題の 2 つに大別した。準備期間中での課題について、JFA(2010a)は AFC アジアカップカ

タール 2011 や日本代表チームの選手選考, トレーニング期間の在り方について述べている. JFA(2011b)は, U-17 日本代表チーム・メキシコ遠征でも, 移動距離や時間, 時差環境適応に関する調整について述べている. したがって, 準備期間中での課題は, 選考, トレーニング期間, 移動, 調整の 4 項目に分類した.

試合期間中での課題について, 加藤ら(1994)は, 国際大会に必要な要素として, 技術, 戦術, 体力, そして最も基礎的な部分である心理的要素の 4 つであることを述べている. また, 松原ら(2006)も, フランスの青少年育成システムの年間計画の方針と目標の中で技術, 戦術, フィジカル, メンタルの 4 つに分類したとしている. ここでのフィジカルとは, サッカーに特化した行動するときの体力を意味する(長澤, 2007). したがって, 「フィジカル」という言葉を体力面として捉えることとする. メンタルとは, 「心的」という意味があり, ここでは心理面として捉えた(山口, 2008). したがって, 試合期間中での課題は, 技術面, 戦術面, 体力面, 心理面の 4 項目に分類した.

2.2.3. 評価基準

試合期間中での, 技術面, 戦術面, 体力面, 心理面の評価基準は, 以下のように設定した(Table2-1).

技術面は, 攻撃の際, パスを繋ぎながらボールを運んでいくか, もしくはドリブルでボールを運んでいくという 2 種類の方法があり, 状況に合わせて選手が選択する. また, 相手にボールを奪われない技術を持つことが優位に試合を進めることが出来る(佐藤, 2014). したがって, 技術面の評価基準として, パスの成功率とボールを奪われた比率を設定した.

戦術面は, 世界と互角に戦うために, ボール支配率を上げ, 試合の主導権を握ることが大切である(JFA, 2007b). 戸塚(2010)も, 2006 年ワールドカップ南アフリカ大会において, ボール支配率が高く, 相手自陣で決定的な場面を作り出すチームが優勝を争っていると述べている. また, Yoshimura & Hasegawa(2002)は, 世界のトップレベルのチームと J リーグチームとの攻撃における戦術の違いを分析した結果, 世界のトップレベルチームには, 有効な攻撃に関して, サッカーの最も重要な得点を奪うこと, およびゴールを狙うシュートに至った攻撃のことであると述べている. したがって, 戦術面の評価基準として, ボール支配率とシュートの本数を設定した.

体力面は, 世界レベルを含めた多くの試合で開始から 76~90 分の時間帯, すなわち試合終了間際での得点が多くなることが報告されている(JFA, 2006). 藤岩(2013)は, 守備側の試合終盤 15 分間にみられる体力の低下や集中力の欠如など, その理由は様々であると述べている. また, 選手が, 試合終了前 15 分間に筋肉疲労から退場した場

合,明らかに体力的要素である疲労が原因である(マルセロ・ロフエ,2008).したがって,試合終了前15分間,試合終了前15分間の筋肉疲労での退場者を設定した.

心理面は,試合中,相手にプレッシャーをかけ合う時間や試合を決定づけるような瞬間が突然訪れて中断したり,リズムのある流れを展開する.その中でも,選手は,特に試合開始直後や試合終了前に多く訪れる瞬間を予測する方法や集中したり,準備を整えたりしておかなくてはならない(ビル・ベスウィック,2006).また,選手は,試合中,一つの実をきっかけに同じような実を連発するケースを見かける(高畑,2008).こうした実の心理を解決するには,国際大会などの経験によって,実に対するとらえ方や考え方をえていく必要がある.したがって,心理面の評価基準として,前半試合開始後15分間と試合中の試合中の冷静さを欠く判断実での退場者,失点後の連続失点を設定した.

Table2-1 試合中での評価基準

項目	評価項目
技術面	パスの成功率, ボールを奪われた比率
戦術面	ボール支配率, シュートの本数
体力面	試合終了前15分間, 試合終了前15分間の筋肉疲労での退場者
心理面	試合開始後15分間, 試合中の冷静さを欠く判断実での退場者, 失点後の連続失点

2.2.4. 試合記録と分析方法

対象になった大会は,試合毎に2名のスタッフによって,試合中のチームパフォーマンス全てをDual Camera Xacti(SANYO VPC-WH1)に記録した.さらにAFCの公式記録をもとに改めてVTRを再生し,以下の9項目についてS級ライセンス(最上級のライセンス)を取得している指導者1名によって分析を行った.

- 1) パスの成功率
- 2) ボールを奪われた比率
- 3) ボール支配率
- 4) シュートの本数
- 5) 試合開始後15分間の失点
- 6) 試合終了前15分間の失点
- 7) 試合終了前15分間の筋肉疲労での退場者
- 8) 試合中の冷静さを欠く判断実での退場者
- 9) 失点後の連続失点

2.3. 結果

2.3.1. 年間スケジュール

2010年7月から2011年12月までの活動記録をもとに、代表チーム (Figure2-1) と U-19 代表 (Figure2-2) の実践活動の分類を示した。

年	2010						2011											
	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
国際大会			ガバナーズカップ ①						AFCチャレンジカップ ②									南アジア選手権 ③
国内リーグ	■	■											■					
トレーニング			■	■	■	■	■	■	■	■								■
選考会			■				■							■	■	■	■	■
OFF期間		■	■							■	■	■	■	■	■	■	■	

Figure2-1 代表チームの年間スケジュール

年	2010						2011										
	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
国際大会													国内リーグ				U-19アジア選手権 ③
国内リーグ	■	■											①		クウェート国外合宿		
トレーニング		■	■	■			■	■	■	■				■	■	■	②
選考会							■							■			
OFF期間				■	■	■	■										

Figure2-2 U-19 代表の年間スケジュール

2.3.2. 分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ

各大会における代表チーム (Table2-2) と U-19 代表 (Table2-3) の活動日程と結果、参加したスタッフ数について示した。

代表チームは、スタッフ 3 名 (監督, アシスタントコーチ, ゴールキーパーコーチ:以下 GK コーチとする) であった。また, U-19 代表チームにおいても, スタッフ 3 名 (監督, アシスタントコーチ, GK コーチ) であった。

Table2-2 分析対象になった活動名・結果・スタッフ (代表チーム)

大会名	日程	結果	スタッフ
ガバナーズカップ	2010年 10月21日	1回戦(敗退)	監督,アシスタントコーチの合計2名.
AFCチャレンジカップ	2011年 3月23日~3月25日	親善試合 ネパール代表(2敗)	監督,アシスタントコーチの合計2名.
		予選敗退(2敗)	
南アジアサッカー選手権	2011年 12月3日~12月7日	予選敗退(3敗)	監督,アシスタントコーチ,GKコーチの 合計3名.

Table2-3 分析対象とした活動名・日程・結果・スタッフ (U-19 代表)

大会名	日程	結果	スタッフ
国内リーグ	2011年 7月10日～7月29日	5位 (2勝1分け3敗)	監督、アシスタントコーチの合計2名。
クウェート国外合宿	2011年 9月25日～10月23日	親善試合 (1勝1分け3敗)	監督、アシスタントコーチ、GKコーチの 合計3名。
U-19アジア選手権	2011年 10月25日～11月4日	予選敗退(5敗)	監督、アシスタントコーチ、GKコーチの 合計3名。

2.3.3. 準備期間中での課題

代表チーム (Table2-4) と U-19 代表 (Table2-5) における実践活動の準備期間中の選考、トレーニング、移動、調整の課題を示した。

なお、代表チームの時期は、2010年10月のガバナーズカップに向けてのトレーニング開始時から2011年12月の南アジアサッカー選手権までとする。また、U-19代表は、2010年7月に赴任し、トレーニング開始時から2011年11月のU-19アジア選手権までとする。

Table2-4 準備期間中での課題 (代表チーム)

大会名	(1)選考会	(2)トレーニング期間	(3)移動	(4)調整
ガバナーズカップ	選手59名から25名選考した。	全員が継続してトレーニングで出来なかった。	大会地に到着するまで2日間要した。	調整を行う施設が十分でなかった。
	9月16日～18日 (3日間)	9月21日～10月17日 (24日間)	10月18日～19日 (2日間)	10月20日 (1日間)
AFCチャレンジカップ	選手25名から22名選考した。	全員が継続してトレーニング出来なかった。	空港から大会地までの行程を約6時間半要した。	相手チームと同じホテルやトレーニング時間が重なるなど問題点が多かった。
	1月15日～1月30日 (16日間)	2月2日～3月13日 (41日間)	3月15日・3月20日～21日 (3日間)	3月16日～3月19日 (4日間)親善試合
南アジアサッカー選手権	選手22名から18名選考した。	全員が継続してトレーニング出来なかった。	大会地に到着するまで2日間要した。	コンディションを調整することが出来た。
	11月15日 (1日間)	11月16日～11月27日 (11日間)	11月29日～30日 (2日間)	12月1日～12月2日 (2日間)

Table2-5 準備期間中での課題 (U-19 代表)

大会名	(1)選考会	(2)トレーニング期間	(3)移動	(4)調整
国内リーグ	選手108名から19名を選考した。	施設の管理体制や栄養面の摂取に問題があった。	移動はなかった。	コンディションを調整することが出来た。
	1月12日～1月25日 (14日間)	2月16日～7月9日 (144日間)	なし	なし
クウェート国外合宿	選手25名から21名を選考した。	中東の強豪チームと試合によって良い経験が出来た。	大会地に到着するまで2日間要した。	コンディションを調整することが出来た。
	9月4日～9月11日 (8日間)	7月30日～9月23日 (56日間)	9月24日～9月25日 (2日間)	9月25日～10月5日 (11日間)
U-19アジア選手権	クウェート国外遠征と同じ選考メンバーであった。	限られた期間で集中して行うことが出来た。	カタール・ドーハ国際空港まで約1時間要した。	コンディションを調整することが出来た。
	なし	9月25日～10月23日 (29日間)	10月23日 (1日間)	10月23日～10月24日 (2日間)

1) 選考会

代表チームの選考会に関しては、ガバナーズカップ 3 日間、チャレンジカップ 16 日間、南アジアサッカー選手権 1 日間かけて行った。ブータンの現地スタッフが、選手の所属チーム、選手との連絡や準備、進行をサポートしてくれた。しかし、選手の大半が、国内リーグ終了後トレーニングを行っていない状態であり、仕事や学校の関係で参加できなかった選手もいた。

U-19 代表の選考会に関しては、2011 年 1 月にサルパン市で 14 日間かけて行った。しかし、トレーニングを継続的に行っていない選手や経済的、地理的な理由で参加出来なかった選手も多数いた。2 回目の選考会は、9 月にクウェート国外合宿前に首都ティンプー市のブータンサッカー協会 (Bhutan Football Federation: 以下、BFF とする) 所有のグラウンドで 8 日間かけて行った。しかし、両親の反対、学校の許可や選手の国籍、年齢の確認が不十分で大会に参加できない選手も多数いた。

2) トレーニング期間

代表チームのトレーニング期間に関しては、選考会后 11 日間から 41 日間行った。国際大会までのトレーニング期間が短い上に、仕事や学校の関係で全員が継続してトレーニングをできない状況であった。

U-19 代表の 2010 年 7 月の赴任から、U-19 アジア選手権まで 211 日間トレーニングを実施した。トレーニング期間中、BFF の限られた予算で運営しているため、寮の施設の管理体制や栄養面の摂取に問題があった。

3) 移動

代表チームの移動に関しては、協会の予算の関係で、首都ティンプー市から大会地まで大半の行程を協会所有のバスで移動することになった。南アジアサッカー選手権は、インド・バグドグラ空港までの行程を約 12 時間かけて移動した。ガバナーズカップは、インド・シッキム州ガントク市までの行程を約 16 時間かけて移動した。AFC チャレンジカップ予備予選前の調整合宿でもネパール・トリブバン国際空港からポカラ市までの行程を約 6 時間半かけて移動した。

U-19 代表の国内リーグの移動は、首都ティンプー市内にある BFF 所有のグラウンドで行われたため、チームコンディションによる影響はなかった。クウェート国外合宿の移動は、ブータン・パロ国際空港からインド・インディラ・ガンディー国際空港まで約 2 時間要した。到着後、インド・デリー市内で 1 泊し、翌日、同国際空港からカタール国際空港まで約 5 時間要した。その後、同国際空港からクウェート国際空港まで約 1 時間であった。U-19 アジア選手権の移動は、クウェート国際空港からカタール・ドーハ国際空港まで約 1 時間要し

たが、チームコンディションによる影響はなかった。

4) 調整

代表チームの調整に関しては、ブータンの高度、気候などの地理的な条件と大会地である対策がなされていなかった。また、調整を行うための施設が十分でなく、対戦する相手チームと同じホテルやトレーニング時間が重なるなどの問題点も多かった。

U-19 代表の調整に関しては、国内リーグでの調整を、首都ティンブー市で行った。クウェート国外合宿の親善試合までの調整は、9月25日から10月5日までクウェートで行った。いずれも、実践活動までの時間が十分にあり、コンディションを調整することが出来た。U-19 アジア選手権は、大会会場であるカタール・ドーハで行った。AFC が、大会会場での宿泊やトレーニング会場などの手配を行っており、大会までコンディションを調整することが出来た。また、U-19 アジア選手権前 2011 年 9 月 25 日から 10 月 23 日までの約 1 ヶ月間、クウェート国外合宿を実施しており、中東の文化や食事、気候などにも慣れることができた。

2.3.4. 試合期間中での課題

代表チーム (Table2-6) と U-19 代表 (Table2-7) における実践活動の試合中の技術面、戦術面、体力面、心理面の課題を示した。

Table2-6 試合期間中での課題 (代表チーム)

大会名	(1)技術面	(2)戦術面	(3)体力面	(4)心理面
ガバナーズカップ	基礎トレーニングを多く実施した。パスミスやボールを奪われることが多かった。	戦術に時間を要した。ボール支配率やシュートの本数が少なかった。	実践トレーニングを多く実施した。試合終了まで体力が持続できない選手も多かった。	過度に緊張する選手や試合開始後15分間の失点があった。
AFCチャレンジカップ	基礎トレーニングを多く実施した。パスミスやボールを奪われることが多かった。	基礎戦術による選手のアプローチやポジションミスが目立った。	実践トレーニングを多く実施した。試合終了まで体力が持続できない選手も多かった。	第2戦目、若手選手がミスを恐れずに前向きに取り組んでくれた。
南アジアサッカー選手権	パスの成功率が低くボールを奪われた比率が高かった。	ボール支配率が低くシュートの本数が少なかった。	試合終了前15分間の退場者や失点する場面があった。	選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場や試合開始後15分間の失点などがあった。

Table2-7 試合期間中での課題 (U-19 代表)

大会名	(1)技術面	(2)戦術面	(3)体力面	(4)心理面
国内リーグ	基礎トレーニングを多く実施した。パスミスやボールを奪われることが多かった。	守備陣と攻撃陣にはっきりと分かれ、基本戦術での構築が出来ていなかった。	実践トレーニングを多く実施した。試合終了前15分間の退場者や失点する場面があった。	過度に緊張する選手や試合開始後15分間の失点があった。
クウェート国外合宿	基礎トレーニングを多く実施した。パスミスやボールを奪われることが多かった。	基礎戦術や実践トレーニングを多く実施した。ボール支配率やシュートの本数が少なかった。	実践トレーニングを多く実施した。中東の強化試合で体力強化にもつながった。	クウェートの強豪チームとの親善試合で戦う姿勢が出てきた。
U-19アジア選手権	パスの成功率が低くボールを奪われた比率が高かった。	ボール支配率が低くシュートの本数が少なかった。	試合終了前15分間の退場者や失点する場面があった。	選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場や試合開始後15分間の失点などがあった。

1) 技術面

技術面に関しては、育成年代ですでに習得しておかなくてはならない基礎的な技術レベルが低いため「止めて蹴る」などのトレーニングをほとんど毎日のようにメニューを導入した。また、技術面のトレーニングでは、選手の興味や集中力を持続させるために、メニューを少しずつ変化させ工夫した。しかし、国際大会では、国際試合の経験不足などの影響から、試合を優位に運べることが出来なかった。

代表チームの試合中のパス成功率は、南アジアサッカー選手権・第1戦目スリランカ代表 77.6%、代表チーム 51.7%、第2戦目インド代表 79.8%、代表チーム 48.0%、第3戦目アフガニスタン代表 86.2%、代表チーム 49.6%であった。

U-19代表の試合中のパス成功率は、U-19アジア選手権・第1戦目カタール代表 76.3%、U-19代表 40.0%、第2戦目タジキスタン代表 68.6%、U-19代表 42.3%、第3戦目バーレーン代表 69.2%、U-19代表 42.9%、第4戦目ヨルダン代表 76.9%、U-19代表 43.8%、第5戦目クウェート代表 59.2%、U-19代表 37.0%であった。

また、代表チームの試合中にボールを奪われた比率は、南アジアサッカー選手権・第1戦目スリランカ代表 22.4%、代表チーム 48.3%、第2戦目インド代表 20.2%、代表チーム 52.0%、第3戦目アフガニスタン代表 13.8%、代表チーム 50.8%であった。

U-19代表の試合中にボールを奪われた比率は、U-19アジア選手権・第1戦目カタール代表 23.7%、U-19代表 60.0%、第2戦目タジキスタン代表 31.4%、U-19代表 57.4%、第3戦目バーレーン代表 30.8%、U-19代表 57.1%、第4戦目ヨルダン代表 23.1%、U-19代表 56.7%、第5戦目クウェート代表 40.8%、U-19代表 63.0%であった。

2) 戦術面

戦術面に関しては、技術トレーニング同様、トレーニングを多く実施した。また、戦術面を行ううえで、指導当初、守備陣と攻撃陣にはっきりと分かれ、チーム全体が連動してプレーすることがなく、基本的な知識が不足していた。そこで、戦術面の改善を行うために、主にゴールを設定した試合形式のトレーニングや個人戦術の3対1、4対1などのボールポゼッショントレーニングを行った。これは、チーム全体が連動し、複数の選手が関わりながら、相手自陣で多くの得点チャンスを作り出す戦術を構築するためである。また、国際大会の戦術面で、予め劣勢が予想されていたため、全体的に守備的な布陣で臨むことにした。しかし、戦術面での選手のアプローチやポジショニングのミスが目立った。また、相手選手にボールを奪われた後のカバーリングが遅れ、バランスを崩し失点するケースが多かった。

代表チームの試合中のボール支配率は、南アジアサッカー選手

権・第1戦目スリランカ代表 67.0%, 代表チーム 32.9%, 第2戦目インド代表 77.1%, 代表チーム 22.9%, 第3戦目アフガニスタン代表 80.7%, 代表チーム 19.3%であった。

U-19 代表のボール支配率は, U-19 アジア選手権・第1戦目カタール代表 72.0%, U-19 代表 28.0%, 第2戦目タジキスタン代表 71.0%, U-19 代表 29.0%, 第3戦目バーレーン代表 71.0%, U-19 代表 29.0%, 第4戦目ヨルダン代表 85.7%, U-19 代表 14.3%, 第5戦目クウェート代表 75.0%, U-19 代表 25.0%であった。

また, 戦術面で, 相手自陣で多くの得点チャンスを作り出すことが出来なかった。代表チームのシュートの本数は, 南アジアサッカー選手権・第1戦目スリランカ代表 25 本, 代表チーム 5 本, 第2戦目インド代表 26 本, 代表チーム 0 本, 第3戦目アフガニスタン代表 26 本, 代表チーム 4 本であった。

U-19 代表のシュートの本数は, U-19 アジア選手権・第1戦目カタール代表 31 本, U-19 代表 6 本, 第2戦目タジキスタン代表 29 本, U-19 代表 3 本, 第3戦目バーレーン代表 23 本, U-19 代表 6 本, 第4戦目ヨルダン代表 30 本, U-19 代表 5 本, 第5戦目クウェート代表 32 本, U-19 代表 7 本であった。

3) 体力面

体力面に関しては, 指導当初, トレーニングを継続的に行っていない選手が多かった。そのため, 体力面を行ううえで, 基礎体力中心のトレーニングではなく, 試合で必要となる技術面, 戦術面の中にも体力的要素を多く取り入れた。しかし, 体力面で, 国際大会までの十分な体力強化が出来なかったために, 試合終了まで体力が持続できない選手も多かった。

代表チームの試合終了前 15 分間の筋肉疲労での退場者は, ガバナズカップ・カメリアユナイテッド戦, 後半 80 分の右ハムストリング筋肉の痙攣により 1 名退場, 南アジアサッカー選手権・第2戦目インド代表戦, 後半 88 分の右ふくらはぎ筋肉の痙攣により 1 名退場, 第3戦目アフガニスタン代表戦, 後半 78 分の右ハムストリング筋肉の痙攣により 1 名退場した。全ての対戦チームの退場者は, 0 名であった。

U-19 代表の試合終了前 15 分間の筋肉疲労での退場者は, 国内リーグ・第4戦目タンSPORT戦, 後半 80 分の右ふくらはぎ筋肉の痙攣により 1 名退場, U-19 アジア選手権・第1戦目カタール代表戦, 後半 87 分の右ふくらはぎ筋肉の痙攣により 1 名退場, 第2戦目タジキスタン代表戦, 後半 75 分の左ふくらはぎ筋肉の痙攣により 1 名退場, 85 分の右ふくらはぎ筋肉の痙攣により 1 名退場した。全ての対戦チームの退場者は, 0 名であった。

次に, 代表チームの試合終了前 15 分間の失点は, 南アジアサッカ

ー選手権・第2戦目インド代表戦,後半83分の失点,第3戦目アフガニスタン代表戦,後半84分の失点であった。

U-19代表の試合終了前15分間の失点は,国内リーグ・第3戦目ジムンドラ戦,後半80分,85分の失点,U-19アジア選手権・第1戦目カタール代表戦,後半80分,85分の失点,第2戦目タジキスタン代表戦,後半80分,82分,85分の失点,第3戦目ヨルダン代表戦,後半80分の失点であった。

4)心理面

心理面に関しては,国際大会の経験不足から過度に緊張する選手によって,選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場,試合開始後15分間の失点や失点後の連続失点するなど心理的な未熟さを露呈した結果であった。

代表チームの選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場は,南アジアサッカー選手権・第3戦目アフガニスタン代表戦,後半3分のチームキャプテンが冷静さを欠く判断ミスによって1名退場した。対戦相手のアフガニスタン代表の退場者は,0名であった。

U-19代表の選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場は,U-19アジア選手権・第2戦目タジキスタン代表戦,後半60分のチームのストライカーが相手の挑発行為によって1名退場した。対戦相手のタジキスタン代表の退場者は,0名であった。

また,代表チームの試合開始後15分間の失点は,ガバナーズカップ・カメリアユナイテッド戦,前半14分の失点,AFCチャレンジカップ・第1戦目アフガニスタン代表戦,前半1分の失点,南アジアサッカー選手権・第3戦目アフガニスタン代表戦,前半3分,9分,14分の失点などいずれも試合開始後14分以内に失点した。

U-19代表の試合開始後15分間の失点は,国内リーグ・第1戦目ドゥルックポール戦,前半4分の失点,第2戦目イエゼン戦,前半2分の失点であり,自陣の味方への不用意なパスミスから試合開始後4分以内に失点した。

次に,代表チームの失点後の連続失点した場面は,南アジアサッカー選手権・第1戦目スリランカ代表戦,前半29分,34分の失点,第3戦目アフガニスタン代表戦,前半3分,9分,14分,18分の失点,後半3分,14分の失点など失点後9分以内に失点した。

U-19代表の失点後の連続失点した場面は,国内リーグ・第3戦目ジムンドラ戦,後半80分,85分の失点,U-19アジア選手権・第1戦目カタール代表戦,後半75分,80分,85分の失点,第2戦目タジキスタン代表戦,後半75分,78分,80分,82分,85分の失点,第3戦目ヨルダン代表戦,前半16分,19分の失点,後半75分,80分の失点,第4戦目バーレーン代表戦,前半28分,29分の失点など失点後5分以内に失点した。

2.4. 考察

2.4.1. 年間スケジュール

代表チームおよび U-19 代表の年間スケジュールでは、代表チームは大会前に継続したトレーニングを行っていないことが分かった。また、U-19 代表においても、2010 年 10 月から 2011 年 1 月までの間、学校の試験期間中であったため、継続したトレーニングを行っていないことが分かった。ブータンの教育制度には、試験の成績や通学日数によって留年制度があるために(平山, 2008), 学校を優先したと考えられる。このことから、代表チームのトレーニングに関しても、学校や職場に理解を求めていく必要がある。したがって、ブータンは、国全体の代表チームの強化策であるトレーニングに対する理解が乏しい結果(松山ら, 2014)だと考えられる。

2.4.2. 分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフ

代表チームは、スタッフ 3 名(監督, アシスタントコーチ, GK コーチ)であった。また、U-19 代表チームにおいても、スタッフ 3 名(監督, アシスタントコーチ, GK コーチ)であった。

しかしながら、日本代表チームは、スタッフ 7 名(監督, コーチ 2 名, フィジカルコーチ, GK コーチ 2 名, コンディショニングコーチ)であり、U-19 代表では、スタッフ 4 名(監督, コーチ, GK コーチ, コンディショニングコーチ)であった(JFA, online)。

このことから、ブータンが、日本代表と比較した場合、スタッフ人数が少ないことが明らかになった。したがって、ブータンは、国全体の代表チームの強化策に対する理解が乏しいため(松山ら, 2014), 限られたスタッフ構成になったと考えられる。

2.4.3. 準備期間中での課題

準備期間中での課題において考察した結果、以下の内容になった。代表チームの選考会やトレーニングに関して松山(2010)は、選手が仕事や学校に通っているため、全員集まる日が少ない、と報告している。これは代表チームの強化策である選考会やトレーニングに対する国全体の理解が乏しい結果だと考えられる。また、国内リーグ終了後トレーニングを行っていない選手が多いため、選考会やトレーニングに大きく影響したと考えられる。さらに、選考会実施後、大会までの期間も短期間に限られていた。西(2008)は代表の強化は短期の強化のみでなく、日々の所属チームでのトレーニングによりなされているとしているが、ブータンでは、そうしたトレーニングに関する理解が不足していると考えられた。また、ブータン特有の文化や習慣、宗教を理解して慎重に進めていく必要がある。文化や習慣では、教育

制度には試験の成績や通学日数によって留年制度がある(平山, 2008). 代表チームのトレーニングに関しても, 学校や職場に理解を求めていく必要がある. 高比良(2009)によると, 初雪によって役所が休日になることもあり, トレーニングにおいても, 初雪の影響により実施できないことがあった. それ以外に, ブータン暦の休日に関しても同様である. 宗教的なものとして, ツェチュ祭の行事やブータン暦 1 月と 4 月の年に 2 回「肉なし月」があり, 選手への栄養面での影響を及ぼしていたと考えられる.

U-19 代表の選考会に関しては, 選考会前に参加者の多くがトレーニングを継続的に行っていなかった. また, 選手の家庭の事情や地理的な理由で参加出来なかったため, 優秀な選手の発掘に至っていない. 選考会について, リバープレート FC 統括育成部長のガブリエル・ロドリゲス(2009)は, 選手を選考するうえで非常に大切な要素であると述べている. しかし, 選手選考後においても, 経済的な理由や学校の許可, 両親の反対によって断念する選手がいた(平山, 2008). また, 1985 年国籍法などの改定によって, ブータンで生まれ育ったにも関わらず, ブータン国籍を取得することが出来ず, 大会に参加できない選手もいた(根本, 2012). したがって, ブータンは, 国全体の代表チームに対する理解が低いと考えられる.

U-19 代表のトレーニングに関しては, トレーニングや試合中に体調不良や集中力が低下, 筋肉の痙攣をおこす選手も多く見られた. レイナー・マートン(2013)によると, これらの症状の原因の一つに, 寮の施設の管理体制や BFF 所有の寮での栄養摂取に関係があると考えられる. 19 歳の選手が摂取する必要エネルギーは, 男性で 1 日当たり 2,650 キロカロリーとされている(若松, 2013). しかし, 国際協力機構(Japan International Cooperation Agency: 以下, JICA とする)によると, ブータン全体の栄養摂取量は, 平均で 26.6%の世帯が, 1 人 1 日当たり 2,124 キロカロリーの最低必要摂取量を満たしていない(JICA, 2010). このことから, 国民全体に栄養面での問題があることが考えられる. 河村(2014)は, 食に対する意識の高さがチームの文化として浸透する一つの要因だと捉え, 選手の栄養摂取量などの食生活の重要性を述べている. したがって, ブータンは, トレーニングを行ううえで, 栄養面での改善を行う必要がある.

代表チームの移動と調整に関しては, ブータンの高度, 気候などの地理的な条件を考慮して行う必要がある. 小鳥居(2012)によると, ブータンの首都ティンブー市は, 約 2500 メートルと高地にあり, 国土のほとんどは急峻な山岳地帯であるため, 移動はバスに頼らざるを得ない. そのため, 首都ティンブー市から国際大会参加の際, 長時間のバス移動は, 選手や指導者に大きな疲労とストレスを与えた. 海外で選手経験のある伊藤壇氏は, 移動する手段や時間は, コンディショ

ン調整するうえで、非常に大切であると述べている(佐藤, 2011)。

他にも、トレーニング環境の問題、対戦相手との配慮の欠如などが挙げられた。鈴木ら(1995)によると、海外遠征は日常と異なる競技環境あるいは生活環境下で行われるものである。したがって、国外遠征を行う代表チームにとっても、大会前の準備や調整を行い、現地の情報を事前に入手しておくなど、多面的な理解をしておかなくてはならないと指摘している。この点において準備に対するブータンの取り組みはなされていないと考えられる。

U-19 代表の移動に関しては、大会スケジュールと移動時間や距離を考慮して対処する必要がある(高見ら, 1997)。また、伊藤(2011)は、移動距離によって、選手のパフォーマンスに大きく影響すると述べている。このことから、U-19 代表は、クウェート国外合宿やU-19 アジア選手権などの実践活動において、選手のパフォーマンスに影響がないように、大会スケジュールと移動時間や距離を考慮して対処しており、チームコンディションによる影響はなかったと考えられる。

調整に関しては、国外遠征における日常と異なる競技環境あるいは生活環境下で行われ、多面的な理解をすることが必要である(鈴木ら, 1995)。また、遠藤(2011)も、日韓ワールドカップや南アフリカ大会の例を挙げ、調整による試合前の環境によって、結果に反映されると述べている。このことから U-19 代表は、国内リーグ、クウェート国外合宿や U-19 アジア選手権などの実践活動において、国外遠征における、現地の情報を事前に入手しておくなど多面的な理解を得て、準備やコンディションの調整を行うことが出来たと考えられる。

2.4.4. 試合期間中での課題

試合期間中での課題において考察した結果、以下の内容になった。技術面に関しては、育成年代で「止めて蹴る」という技術レベルがかなり低く、ほとんど毎日のようにトレーニングメニューに加える必要があった。U-19 代表に関しては、トレーニング全体の 14.0%を行った(松山ら, 2013)。また、トレーニング実施の際、意欲を持たせ集中力を持続させるために、メニューを少しずつ変化させる工夫を行ったと考えられる(湯浅, 2000)。しかし、代表チームの南アジアサッカー選手権のパス成功率は、1 試合平均 49.8%、U-19 代表の U-19 アジア選手権は、1 試合平均 41.2%であった。このことから、代表チームの対戦相手の 1 試合平均 81.2%、U-19 代表の対戦相手の 1 試合平均 70.0%と比較すると、ブータンは、パスの成功率が低かった。

また、代表チームの南アジアサッカー選手権のボールを奪われた比率は、1 試合平均 50.2%、U-19 代表の U-19 アジア選手権は 1 試合平均 58.8%であった。このことから、代表チームの対戦相手の 1 試合平均 18.8%、U-19 代表の対戦相手の 1 試合平均 30.0%と比較すると、

ブータンはボールを奪われた比率が高かった。技術面に関して佐藤(2014)は、相手にボールを奪われない技術を持つことが優位に試合を進めることが出来ると述べている。クリス・アンダーセンら(2014)も、ボールを奪われる回数が少なかったチームの勝率は44%、多かったチームの勝率は27%であり、ボールを奪われる比率が勝敗に関係していると述べている。こうした技術面に関して小野(2002)は、育成年代からの積み重ねが不可欠であり、ボールコントロール、パスやシュートなどの基本技術がないと世界では通用しないと述べている。したがって、ブータンが、技術面を向上していくために、長期的視野に立ち、育成年代から技術面を行っていく必要がある。

戦術面に関しては、技術トレーニング同様、基礎的な個人戦術のトレーニングを多く時間費やす必要があった。戦術面は、グループやチームの戦術達成力を確かめることが学習の中心である(浅岡, 2000)。また、戦術面の徹底を行うために、技術面、フィジカル面と戦術を並行して行うことが競技力向上に効果的である(Csanádi, Árpád, 1978)。そのため、代表チームは、ブータン国内で試合形式のトレーニングや、基礎的な個人戦術を身に付けさせるために、ボールポゼッションのトレーニングを多く実施した(JFA, 2007b)。また、U-19 代表の戦術を構築するために実施した、クウェート国外合宿は、非常に良い実践になったと考えられる。

しかし、代表チームの南アジアサッカー選手権のボール支配率は、1試合平均25.0%、U-19 代表のU-19 アジア選手権は1試合平均25.1%であった。このことから、代表チームの対戦相手の1試合平均74.9%、U-19 代表の対戦相手の1試合平均74.9%と比較すると、ブータンは、ボール支配率が低かった。

また、代表チームの南アジアサッカー選手権のシュートの本数は、1試合平均4.7本、U-19 代表のU-19 アジア選手権は1試合平均5.4本であった。このことから、代表チームの対戦相手の1試合平均25.7本、U-19 代表の対戦相手の1試合平均25.0本と比較すると、ブータンは、シュートの本数が少なかった。クリス・アンダーセンら(2014)は、ボール支配率が高いチームは、敗戦しない確率が7.6%高くなり、得点チャンスも多くなる。1得点は、平均してシュート9本から生まれると述べている。JFA(2007b)は、国際大会の結果から世界と互角に戦うために、ボール支配率を上げ、試合の主導権を握ることが大切だと述べている。戸塚(2010)も、2006年ワールドカップ南アフリカ大会において、ボール支配率が高く、相手自陣で決定的な場面を作り出すチームが優勝を争っていると述べている。このことから、ブータンのボール支配率やシュートの本数が少なく、試合を優位に進めることが出来なかったと考えられる。したがってブータンは、技術面と同様に長期的視野に立って、育成年代から戦術面を行っていく必要が

ある。

体力面に関しては、国内リーグや国際大会終了後、トレーニングを継続的に行っていない選手が多く、基礎体力中心のトレーニングを多く実施する必要がある。また、体力面で、サッカー競技の特異性の原則を考えた場合、体力強化だけのトレーニングではなく、技術面、戦術面のトレーニングの中に体力的要素を多く取り入れることが大切である(若松, 2013)。Bangsbo(2008)も、サッカー競技においてボールを使わない体力トレーニングは専門的かつ効率的ではないと述べている。このことから、ボールトレーニングや、実際の試合を通して体力強化を図ることが、最良のトレーニング方法であると考えられる。

しかし、代表チームおよび U-19 代表が、対戦相手と比較して、試合終了前 15 分間の筋肉疲労での退場者や試合中の体力が低下し、試合終了前 15 分間に失点する場面が多かった。その要因について、代表チームは、国内リーグや国際大会終了後、トレーニングを継続的に行っていない選手が多かった。そのために、試合終了前 15 分間の筋肉疲労での退場者や試合中の体力が低下し、試合終了前 15 分間に失点する場面が多かったと考えられる。レイナー・マートン(2013)は、トレーニングを中断すると急速に体力の低下や不調を感じると述べている。このことから、代表チームは、継続的に体力トレーニングを行うことである。

U-19 代表は、継続的なトレーニングの必要性に加えて、U-19 アジア選手権の試合日程が 11 日間で 5 試合であり、次の試合までの休養が 2 日間しかなく過密であったと考えられる(The Asian Football Confederation, online)。また、U-19 代表のボールを奪われた比率は、1 試合平均 58.8%、ボール支配率は、1 試合平均 25.1%であった。そのために、運動量の増加とともに体力が低下し、試合終了 15 分前に失点したと考えられる(佐藤, 2014)。

こうした試合の状況から、戸塚(2010)は、国際試合の連戦によって、体力的な疲労も蓄積される。そのため、試合の勝負どころの見極める力や試合中での適切にエネルギーを温存するためのペース配分について考える必要があると指摘している。したがって、ブータンは、継続的なトレーニングに加えて、体力強化トレーニングの工夫と育成年代から多くの国際大会を経験させ、運動量の増加を抑える効果的な試合運びが必要である。

心理面に関しては、選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場は、選手が高いネガティブなエネルギーに移行し自己コントロールを失い、相手の挑発によって心理状態が急変したと考えられる(ビル・ベスウィック, 2006)。このことから、試合中に選手が冷静さを欠く状況になった時、ニュートラルに心理状態にしてから、プラス思考に転換

出来るような自己コントロール力を身に付ける必要がある(高畑, 2008).

次に, 試合開始後 15 分間の失点に関して, 金本ら(2002)によると「失敗するのが怖い」, 「失敗するのではと不安に思った」などの「不安因子」や, 「練習が足りなかった」, 「試合に対する対策が不足していた」などの「準備不足の因子」などによって過度の緊張感がもたらされたと述べている. 市村(1965a; 1965b)は, 過度の緊張感から集中力が散漫になったことによる失点であると述べている. このことから, 心理面で, 選手が試合前にポジティブな考えの思考や行動をとる, 自分の感情をコントロールする, ゆっくりと集中の範囲を狭め, 集中力を高めていくなど, リラックスした状態の中で行う必要がある(ビル・ベスウィック, 2006).

また, 失点後の連続失点する場面に関しては, 試合パターンの変化を認識し, 注意喚起することが出来なくなった. また, 供給出来るエネルギーが低下し, 疲労によって集中力が欠如したと考えられる(藤岩, 2013). 高畑(2008)は, ミスしてしまったイメージが, 脳で過去の類似したミスの記憶映像と結びつき, さらにミスを誘発すると述べている. こうした不安因子を少しでも取り除くためには, 国際大会などの経験を多く積ませる必要がある. 乾(1996)は, 1995年ユニバーシアード国際大会で日本代表チームが優勝した勝因の一つとして, 海外強化遠征による豊富な国際経験を挙げている. したがって, ブータンは, 育成年代から多くの国際大会を経験させ, 日ごろのトレーニングから心理面を強化していくことである.

以上のことから, ブータンが, スタッフ数, 施設および選手の競技能力などにおいて, 日本とは大きく異なることが示唆された. さらに指導者は異文化において, それぞれの時期に様々なストレスを抱えることが明らかとなった.

2.5. まとめ

本研究では, 海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため, 事例研究を行った. 対象は海外派遣サッカー指導者 1 名であり, ブータンにおける約 1 年半にわたるコーチング記録をもとに, コーチング環境の実態を明らかにすることを目的とした.

1) 年間スケジュールでは, 代表チームは大会前に継続したトレーニングを行っていなかった. また, U-19 代表チームは, 2010 年 10 月から 2011 年 1 月まで学校の試験期間中で継続したトレーニングを行ってなかった. したがって, ブータンは, 国全体の代表チームの強化策であるトレーニングに対する理解が乏しい結果だと考えられる.

2) 分析対象になった大会活動日程と結果・スタッフでは, 代表チームおよび U-19 代表チームのスタッフは 3 名であった. したがって,

ブータンは、日本代表と比較した場合、スタッフ人数が少ないことが明らかになった。

3) 準備期間中での課題として、選考会やトレーニングは、ブータンが、国全体の代表チームの強化策に対する理解が乏しいことが挙げられた。トレーニング期間において、トレーニングの量や質の問題だけでなく、栄養摂取などの育成環境に問題があった。それに加え、ブータン特有の文化や習慣、宗教を理解して慎重に進めていく必要がある。移動と調整は、ブータンの高度、気候などの地理的な条件を考慮し、大会前の準備や調整を行い、現地の情報を事前に入手しておくなど、国外遠征を行う際、多面的な理解をしておく必要がある。

4) 試合期間中での課題として、技術面は、ブータンが、対戦相手と比較して、パスの成功率が低かった。また、ボールを奪われた比率が高かった。したがって、ブータンは、育成年代から長期的視野に立ち、育成年代から継続的に技術面を行っていく必要がある。戦術面は対戦相手と比較して、ボール支配率が低かった。また、シュートの本数が少なかった。したがって、ブータンは、育成年代から長期的視野に立ち、育成年代から戦術面を継続的に行っていく必要がある。体力面は、ブータンは、対戦相手と比較して、試合終了前 15 分間の筋肉疲労での退場者や試合中の体力が低下し、試合終了前 15 分間に失点する場面が多かった。したがって、ブータンは、継続的なトレーニングに加えて、体力強化トレーニングの工夫と育成年代から多くの国際大会を経験させ、運動量の増加を抑える効果的な試合運びが必要である。心理面は、対戦相手と比較して、選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場や試合開始後 15 分間の失点が多かった。したがって、ブータンは、育成年代から多くの国際大会を経験させ、日ごろのトレーニングから心理面を強化する必要がある。

以上のことから、ブータンは、スタッフ数、施設および選手の競技能力などにおいて、日本とは大きく異なることが示唆された。さらに指導者は異文化において、それぞれの時期に様々なストレスを抱えることが明らかとなった。

第 3 章

海外派遣サッカー指導における コーチング環境の実態調査

3.1. はじめに

第 2 章では、海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため、事例研究を行った。対象は海外派遣サッカー指導者 1 名であり、ブータンにおける約 1 年半にわたるコーチング記録をもとに、コーチング環境の実態を明らかにすることを目的とした。

このことから、ブータンのスタッフ数、施設および選手の競技能力などにおいて、日本とは大きく異なることが示唆された。これらの FIFA ランキング下位であるブータンサッカーの課題から、アジア諸国でサッカーが普及し、発展していくことによって、アジア全体のレベルアップを促し、アジア全体の FIFA ランキングを上げていくことに繋げていく必要がある。しかし、ブータン同様、これまで派遣されたアジア貢献事業においても、サッカーのレベルは、まだ高いとは言えず、FIFA ランキングによると、現在、ランキング 62 位のザンビアが最高位で、それ以外の国は、すべて 100 位以下である (FIFA, online)。また AFC に加盟している 47 協会中で、現在の最高位は日本の 53 位であり、ランキング 100 位以内のチームはわずか 9 チームにすぎない。

これらのアジア諸国でサッカーが普及し、発展していくことはアジア全体のレベルアップを促し、結果としてもアジア全体の FIFA ランキングを上げていくことにも繋がるであろう。その為には、各国が世界をスタンダードとした強化策推進のポリシーを明確に揚げ、育成強化に取り組む事が必要である。その点、現在 JFA のアジア貢献事業で掲げている育成年代を指導する現地のコーチング環境の実態を把握し、指導者の資質を向上させることは非常に大切である (JFA, 2010b)。松原ら (2006) は、競技スポーツで、指導者が選手育成を行うことは世界の常識となっており、一つの国がサッカーで成功するには、コーチング環境と育成強化が鍵であると述べている (小野, 2002)。

これまで派遣された JFA 公認指導者達は、派遣期間の成果、また現状や課題に関しての内容を報告書や学術論文にて報告をしている (JFA の報告書；曾根, 2008；松山ら, 2014)。これらの報告は、何れも各国の競技力向上の為には育成年代の指導体制の見直しや指導者の資質向上の重要性を示している。

しかしながら先行研究において、指導者に関しての報告の他に、各国のコーチング環境の実態を調査した事例は報告されていない。

これまで各国の評価には主に、FIFA ランキングが使用されているが、これはあくまでも A 代表の評価である為、育成年代の実態を反映しているとは考えにくい。アジア間での共存共栄を果たすためにも各国のコーチング環境の実態を捉えることはこれから、どのようにして各国が成長していくべきかの筋道を示すためにも必要であると考えられる。

そこで本研究では量的研究として、ブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために、FIFA ランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行った。

3.2. 方法

JFAアジア貢献事業に参加した45名の中でフットサル代表コーチ3名、審判インストラクター2名、女子代表監督もしくはコーチ4名の役職を除いた男子代表監督、育成年代のユースチーム監督もしくはコーチ36名を調査対象として質問紙の調査を実施した。得られた回答のうち、記入漏れおよび誤記入のあったものを除いた24名を分析対象とした(有効回答率66.7%)。調査は、電話での承諾を得たうえで、質問紙を郵送し返信した形と研究者本人が監督に出向き、調査の目的などを簡潔に説明し、参加の同意を得た上で回答してもらい、その場で回収した。

3.2.1. 調査内容

コーチング環境の実態を調査するために、コーチングスタッフの人数(専任・兼業)、グラウンド保有(専用・借用)、ピッチ状況(土・芝・人口芝)、使用しているグラウンドの広さ、観客席、照明(有・無)、クラブハウス(有・無)の内容を調査した。また、指導している選手の能力について、同じ年代の日本代表チームの能力を100とした場合、技術面および戦術面の比率(%)を調査した。

次に選手の競技能力を調査するために、松山ら(2014)が、作成した技術面、戦術面、体力面、心理面の4項目を基に、安部ら(2012)の予備調査の結果を以下のように分類した。

技術的な観点は、「パス(シュート)技能」、「トラップ技能」と「ドリブル&キープ技能」とした。戦術的な観点は「戦術理解度」、「状況認知技能」、「ポジショニング」と「指示」とした。体力的な観点は、「持久力」、「スピード」、「筋力」、「敏捷性」と「体格」とした。心理的な観点は、「向上心」、「目標設定」、「負けず嫌い」、「競技意欲」、「素直さ」、「信頼感」や「リーダーシップ」に分類した。

さらに、安部ら(2012)の予備調査を基に作成した選手の競技力評価尺度6因子42項目の中から、大学サッカー監督3名、サッカー経験のある大学院生8名によって、指導者による選手の競技力評価基準として技術得点として7項目、戦術得点として3項目、体力得点として5項目、心理得点として5項目を設定し、合計20項目から成る設問を設定した。

設問の冒頭で、同じ年代の日本代表チームの能力と比較して、「以下に挙げるそれぞれの質問項目について、その国の選手にどの程度当てはまるかを考えて該当する数字を○で囲んでください」と説明

し、5件法(5:非常によく当てはまる～1:全く当てはまらない)にて回答を求めた。そして、各設問に対して5(5～1点)段階に評価し、全項目の得点を算出して総得点を算出し、総合評価を行なった。また、全項目ごとの合計点を競技力評価得点として算出した。

3.2.2. 調査期間

2014年4月から2014年8月であった。

3.2.3. 調査方法

海外派遣サッカー指導者が赴任した直後の時期のFIFAランキングによって算出した上位群(n=8, 92位-138位)、中位群(n=8, 141位-187位)と下位群(n=8, 190位-未加盟国)に3群に分け比較検討した(Table3-1)。

3.2.4. 統計処理

本実験において得られた測定値については、全ての統計にはIBM SPSS Statistics 21 を使用して一元配置分散分析を行った。さらに、そこで有意差を認められたものについてはBonferroniの多重比較を行った。なお、それらの統計上の有意水準は5%とした。

Table3-1 海外派遣サッカー指導者が赴任した直後のFIFAランキング表(上位群・中位群・下位群)

指導者	分類	赴任国	赴任時期	ランキング
1	上位群	ザンビア	Mar-09	92
2		シリア	Sep-10	94
3		シリア	Jan-06	100
4		シリア	Jun-09	104
5		シンガポール	Apr-11	112
6		シリア	Jun-07	114
7		キルギス	Jul-13	137
8		バングラデシュ	Sep-11	138
9	中位群	タジキスタン	Jul-11	141
10		スリランカ	Apr-07	160
11		スリランカ	Jun-09	161
12		カンボジア	Dec-10	166
13		台湾	May-12	168
14		フィリピン	Mar-02	175
15		カンボジア	Jun-09	179
16		カンボジア	Dec-13	187
17	下位群	ラオス	Jul-12	190
18		フィリピン	Aug-06	192
19		マカオ	Feb-06	192
20		ブータン	Apr-08	200
21		ブータン	May-12	201
22		グアム	Feb-05	205
23		サイパン	Jul-11	未加盟
24		サイパン	Mar-10	未加盟

3.3. 結果

3.3.1. コーチング環境

コーチング環境(スタッフ数・施設)を示した(Table3-2)。

その結果,日本と比較して,コーチングスタッフは,代表および育成年代の人数が少ないことが明らかになった。また,グラウンドを保有している国は,17ヶ国であった。ピッチは,芝であると答えた国は,11ヶ国であった。使用しているグラウンドの広さは,2.5面以上が,4ヶ国であった。使用出来るゴール数は,2組以上が,7ヶ国であった。グラウンドの観客数は,300名以上が5ヶ国であった。照明が有ると答えた国は,12ヶ国であった。クラブハウスが有ると答えた国は,13ヶ国であった。

Table3-2 コーチング環境(スタッフ数・施設)

指導者	群	国	カテゴリー	コーチングスタッフ			グラウンド 保有	ピッチ	広さ	ゴール	観客席	照明	クラブ ハウス	ランキング
				専属	兼業	合計								
		日本	代表	7	0	7	専用	芝	2.5面以上	2組以上	300名以上	有	有	50
			育成	4	0	4								
1	上位群	ザンビア	育成	0	3	3	専用	芝	2面	2組以上	0名	有	無	92
2		シリア	育成	1	1	2	専用	人口芝	ハーフ	1組	0名	無	無	94
3		シリア	育成	1	1	2	専用	芝	1面	1組	100名程度	有	有	100
4		シリア	育成	1	1	2	借用	土	1面	2組	0名	無	無	104
5		シンガポール	育成	1	2	3	借用	芝	1面	2組	100名程度	有	無	112
6		シリア	育成	1	1	2	借用	人口芝	1面	2組以上	0名	無	無	114
7		キルギス	育成	1	1	2	専用	芝	2.5面以上	2組以上	100名程度	無	有	137
8		バングラデシュ	育成	1	1	2	専用	芝	2.5面以上	2組以上	0名	無	有	138
9	中位群	タジキスタン	育成	1	1	2	専用	人口芝	1面	2組	300名以上	無	有	141
10		スリランカ	育成	1	1	2	専用	芝	1面	1組	300名以上	無	有	160
11		スリランカ	育成	1	2	3	専用	人口芝	1面	2組	200名程度	有	有	161
12		カンボジア	育成	2	0	2	借用	芝	1.5面	2組	100名程度	有	有	166
13		台湾	育成	1	1	2	借用	土	2面	2組以上	200名程度	有	無	168
14		フィリピン	代表	1	2	3	専用	芝	2面	2組	300名以上	有	無	175
15		カンボジア	育成	2	0	2	専用	土	1面	1.5組	0名	無	有	179
16		カンボジア	育成	2	0	2	専用	芝	2.5面以上	2組以上	0名	無	有	187
17	下位群	ラオス	代表	2	1	3	専用	人口芝	2面	2組	300名以上	無	有	190
18		フィリピン	代表	2	0	2	専用	土	2面	1組	200名程度	無	無	192
19		マカオ	代表	1	1	2	専用	人口芝	2.5面以上	2組以上	300名以上	有	有	192
20		ブータン	代表	1	2	3	専用	人口芝	1面	1組	0名	無	無	200
21		ブータン	代表	1	2	3	専用	芝	1面	1組	300名以上	有	有	201
22		グアム	代表	1	0	1	専用	芝	1面	2組	100名程度	有	有	205
23		サイロン	代表	1	1	2	借用	土	1面	1組	100名程度	有	無	300
24		サイロン	代表	1	1	2	借用	人口芝	1面	2組	100名程度	有	無	300

※日本(FIFAランキング2016年11月現在)

3.3.2. 指導者による選手の競技力(技術・戦術)比率

海外派遣サッカー指導者が指導している選手の能力について,同じ年代の日本代表チームの能力を100とした場合,技術面および戦術面の比率(%)を示した(Table3-3)。

その結果,技術面の平均値47.1%,戦術面の平均値36.9%であり,いずれも日本と比較して技術・戦術面が劣っていることが明らかになった。

Table3-3 指導者による選手の競技力(技術・戦術)比率

指導者	分類	国	技術面 (%)	戦術面 (%)	FIFA ランキング
		日本	100	100	50
1	上位群	ザンビア	50	30	92
2		シリア	70	50	94
3		シリア	75	65	100
4		シリア	70	50	104
5		シンガポール	60	60	112
6		シリア	30	20	114
7		キルギス	45	50	137
8		バングラデシュ	50	70	138
9	中位群	タジキスタン	60	60	141
10		スリランカ	60	20	160
11		スリランカ	30	20	161
12		カンボジア	70	30	166
13		台湾	20	20	168
14		フィリピン	60	20	175
15		カンボジア	40	40	179
16		カンボジア	70	30	187
17	下位群	ラオス	30	20	190
18		フィリピン	40	20	192
19		マカオ	20	60	192
20		ブータン	30	30	200
21		ブータン	30	30	201
22		グアム	30	20	205
23		サイパン	40	40	300
24		サイパン	50	30	300

※日本(FIFAランキング,2015年11月現在)

3.3.3. 指導者による選手の競技力評価

指導者による選手の競技力評価4項目の総合得点の平均値及、標準偏差及び一元配置分散分析を行った(Table3-4,5). 結果を示した種目についての頻度の比較においては、体力得点と心理得点に主効果が認められた。下位検定の結果、体力得点では、上位群が下位群より有意に高値であった($F(1, 22)=4.09, p<0.05$)。心理得点でも同様に上位群が下位群より有意に高値であった($F(1, 22)=4.25, p<0.05$)。

また、指導者による選手の競技力評価全項目ごとの得点では、技術得点での「簡単にはボールを奪われないキープ力」で上位群が下位群より有意に高値であった($F(1, 22)=5.15, p<0.05$)。体力得点での「守備での1対1が強い」、「対人プレーで当たり負けはしない」でも同様に上位群が下位群より有意に高値であった($F(1, 22)=4.11, p<0.05$), ($F(1, 22)=4.41, p<0.05$)。また、心理得点での「いつでも、自信をもってプレーしている」の得点は上位群が中位群や下位群より有意に高値であった($F(1, 22)=7.77, p<0.05$)。

したがって、選手の競技能力においては、ランキング下位群は上位群に比べ体力得点と心理得点において劣っていることが明らかになった。他に、技術得点でも「簡単にはボールを奪われないキープ力」という項目においては上位群と下位群に違いが見られた。

Table3-4 指導者による選手の競技力評価4項目の総合得点

指標	上位群 (n=8)	中位群 (n=8)	下位群 (n=8)	F値	多重比較結果
技術得点	17.00±3.93	14.63±5.15	11.63±4.44	n.s.	
戦術得点	6.50±2.51	5.63±2.26	4.88±2.23	n.s.	
体力得点	15.50±5.29	11.88±2.64	10.00±3.30	4.09*	上位群>下位群
精神得点	18.25±2.92	16.25±3.99	13.50±2.78	4.25*	上位群>下位群

*:P<.05,ns:not significant

Table3-5 指導者による選手の競技力評価全項目ごとの得点

	指標	上位群 (n=8)	中位群 (n=8)	下位群 (n=8)	F値	多重比較結果
技術得点	ボールコントロール中プレー中の視野が広い	2.25±1.28	2.13±1.25	1.50±0.76	n.s.	
	ボールコントロール中イメージをもってプレーしている	2.13±0.99	2.13±0.99	1.63±0.74	n.s.	
	プレッシャーの状況でもボールを正確に止める	2.25±1.28	1.75±1.04	1.38±0.52	n.s.	
	様々な種類のキックを蹴ることができる	2.13±0.83	1.88±0.64	1.63±0.74	n.s.	
	左右での正確なロングボールを蹴ることができる	1.88±0.83	1.50±0.53	1.50±0.76	n.s.	
	簡単にはボールを奪われないキープ力 ドリブルテクニックに優れている	3.25±0.89 3.13±1.13	2.13±1.13 3.13±0.83	1.75±0.89 2.25±0.71	5.15*	上位群>下位群
戦術得点	戦術理解度が高く指示したことを理解して実行できる	2.13±0.99	1.88±1.13	1.88±0.83	n.s.	
	試合中の状況を考えプレーできる	2.13±0.84	1.88±0.83	1.50±0.76	n.s.	
	素早く適切なポジショニングを取ることができる	2.25±1.04	1.88±0.64	1.50±0.76	n.s.	
体力得点	ジャンプ力を生かしたヘディングが強い	2.75±1.17	2.50±0.76	1.75±0.71	n.s.	
	守備での1対1が強い	3.00±1.31	2.25±0.71	1.63±0.74	4.11*	上位群>下位群
	対人プレーで当たり負けはしない	3.63±1.41	2.38±0.74	2.13±0.99	4.41*	上位群>下位群
	90分間走り続けるだけの体力がある	2.75±1.28	2.00±0.76	2.00±1.07	n.s.	
	相手より上回るスピードがある	3.38±1.19	2.75±0.71	2.50±0.53	n.s.	
精神得点	日常生活でもサッカーに対する意欲が高い	3.25±1.28	3.00±1.31	1.88±1.13	n.s.	
	指導者の言うことを素直に聞くことができる	4.00±1.07	4.00±1.07	3.25±0.71	n.s.	
	練習や試合で向上心を持って意欲的に取り組む	4.00±0.93	3.75±0.71	3.25±0.89	n.s.	
	困難な場面に直面しても妥協しない	3.13±1.13	2.75±0.89	2.50±0.76	n.s.	
	いつでも自信をもってプレーしている	3.88±0.64	2.75±0.89	2.63±0.52	7.77*	上位群>中位群 上位群>下位群

*:P<.05, ns:not significant

3.4. 考察

3.4.1. コーチング環境

海外派遣サッカー指導者が赴任先のコーチング環境では、日本と比較して代表チームのコーチング人数、グラウンドの広さ、ゴール数、観客数などが大きな違いであった。したがって、ボタン同様、アジア貢献事業の対象国のスタッフ数や施設といったコーチング環境は、日本とは大きく異なることが明らかになった。

3.4.2. 指導者による選手の競技力(技術・戦術)比率

海外派遣サッカー指導者が、指導している選手の能力について、

同じ年代の日本代表選手の能力を100とした場合、技術面の平均値47.4%、戦術面36.7%であった。したがって、ブータン同様、アジア貢献事業の対象国の海外派遣サッカー指導者が、指導している選手の能力は、技術、戦術面で日本よりも劣っていることが明らかになった。

3.4.3. 指導者による選手の競技力評価

指導者による選手の競技力評価4項目(体力面、技術面、戦術面、心理面)は、サッカーに必要な要素である(加藤ら,1994)。この4つの要素を向上させていくためには、トレーニングの負荷と休息の最適なバランスを考えながら継続的に展開していくことが大切である(ゲロ・ビザンツら,1997)。また、この4項目におけるトレーニングの関係は、体力から技術、戦術、そして心理面という繋がりによって成り立っている。体力トレーニングを継続的に展開していくことが不足した場合、大きな疲労によって、パスやシュートの正確さといった技術にも影響する。また、疲労によって、正確な運動や知的活動に集中できないため、戦術的な判断にも大きく影響する。更にテューダー・ボンパ(2006)は、心理的な要因が身体的能力の改善に左右されるので、さらなる自信に繋がると報告している。ことから完璧な体力は、結果的に最高の心理状態をもたらすと述べている。

この観点から、考察していくと「体力得点」において、上位群が下位群より有意に高値であったことに関して、上位群の指導体制の影響が考えられる。上位群であるシンガポールU-17代表監督に赴任した古賀琢磨氏によると、U-8~U-12までのグラスルーツ、普及だけでなく、U-13からU-18までの学校単位のサッカーやプロクラブチーム下部組織があると述べている(JFA, 2012a)。また、バングラデシュでコーチに赴任した山口敬宣氏によると、バングラデシュは、1986年に国立スポーツ学院として全寮制の全県5か所に学校を設立した。また、U-14からU-22年代の代表チームにそれぞれ3から10名程度送り出しており、プロリーグに所属している選手も存在すると述べている(JFA, 2012b)。

一方、下位群のブータン代表に赴任した行徳浩二氏によると、これから発展するためには良いグラウンドが必要で、育成年代の計画的なトレーニングの継続、多くの対外試合が必要であると述べている(JFA, 2009a)。また、ラオス代表監督に赴任した木村浩吉氏は、学校単位での部活やチームがなく、ラオスリーグのいくつかの下部組織に入ってサッカーをしている子が数人いるだけである。育成年代のクラブづくりと、それに伴う指導者養成と育成年代のゲーム環境を構築することが急務であると述べている(JFA, 2014a)。このことから、上位群では、学校単位のサッカーやプロクラブチーム下部組織があり、継続的に展開していくコーチング環境が整っているために、「体

力得点」が下位群より有意に高値であったと考えられる。

また、「心理得点」において、上位群が下位群より有意に高値であったことに関して、下位群のグアム代表監督に赴任した築館範男氏によると、赴任当初、トレーニングに対する優先順位は低かった。しかし、トレーニングを継続し、努力した結果によって「競技サッカーのメンタリティー」を植えつけ、トレーニングの優先順位が上がった。また、国を代表して戦うプライドも芽生えたと述べている(JFA, 2009b)。また、同様にマカオ代表監督に赴任した影山雅永氏は、選手にとってサッカーは生活における優先順位が一番ではない。そのため、代表選手になることの誇りや意義、そしてトレーニングや試合に参加することによって得られる上達や充実などを複合的に考えることであると述べている(JFA, 2007c)。このことから、下位群の選手にとって、サッカーは生活における優先順位が低く、トレーニングを継続的に行っていないため、「心理得点」においても「体力得点」との関係から高値になったと考えられる。

指導者による選手の競技力評価全項目ごとの得点の結果から、技術得点での「簡単にはボールを奪われないキープ力」で上位群が下位群より有意に高値であった。体力得点での「守備での1対1が強い」、「対人プレーで当たり負けはしない」でも同様に上位群が下位群より有意に高値であった。また、心理得点での「いつでも、自信をもってプレーしている」の得点は上位群が下位群より有意に高値であった。

技術得点での「簡単にはボールを奪われないキープ力」に関して、下位群のブータン代表監督に赴任した松山ら(2014)は、育成年代で技術や戦術面において習得されていなかったために基礎的なトレーニングを多く実施する必要があったと述べている。また、中位群のチャイニーズ・台北U-18代表監督に赴任した黒田和生氏はチャイニーズ・台北の選手が同世代の日本の選手と比較して育成年代での技術レベルが低く、パスの基本が徹底されていないと述べている(JFA, 2013b)。以上の報告からも今回の結果によって下位群や中位群は、上位群と比較して育成年代での基礎技術が徹底されていなかったことを示唆するものであった。小野(2010)は、ボールコントロール、パスやシュートなどの基本技術がないと世界では通用せず、育成年代からの積み重ねが不可欠であると述べている。したがって、技術得点で、下位群、中位群が上位群との差を埋めていく為には、長期的視野に立ち、育成年代からの基礎技術を徹底して行っていく必要がある。

また、体力得点での「守備での1対1が強い」、「対人プレーで当たり負けはしない」の基礎体力に関して、下位群のブータン代表監督に赴任した松山ら(2014)によると、トレーニングを継続的に行っていない選手が多かった。そのため、試合で必要な1対1などの守備力や対

人プレーなどのレベルの低下は、実践的な体力トレーニング不足によるものだと述べている。また、北マリアナ諸島代表チーム監督に赴任した関口潔氏やブータン代表監督に赴任した小原一典氏は、各カテゴリーの育成強化を継続的に行っていない。そのため、基礎体力の要素を取り入れながら、ボールを使った実践的なトレーニングを行っていると述べている(JFA, 2011c; 2013b)。以上の報告からも今回の結果によって下位群は、上位群と比較して育成年代での基礎体力が徹底されていなかったことを示唆するものであった。若松(2013)は、サッカー競技の特異性の原則を考えた場合、体力強化だけのトレーニングではなく、技術面、戦術面のトレーニングの中に体力的要素を多く取り入れることが大切であると述べている。Bangsbo(2008)も、体力だけでなく技術的、戦術的レベルをも向上させ、しかも高い動機づけのもとで行う必要がある。そのため、ボールトレーニングや、実際の試合を通して体力強化を図ることが、最良のトレーニング方法であると述べている。したがって、体力得点で、下位群が上位群との差を埋めていく為には、ボールトレーニングなどのサッカー競技の特異性の原則を考えた体力強化を図る必要があると考えられる。

心理得点での「いつでも、自信をもってプレーしている」に関して、下位群のブータンU-19代表監督に赴任した松山ら(2015b)は、普段からトレーニングや国際大会の経験が不足し、自信を持ってプレーすることが困難であったと述べている。2010年からカンボジアU-16代表監督兼ユースディレクターに赴任した吉岡大介氏によると、選手は、代表チームに選出された喜びよりも、自信をすでになくしていた。そのため明らかに他国と戦うことを恐れていたと述べている(JFA, 2011a)。これらのことから、今回の結果によって下位群は、上位群と比較して公式戦などの試合経験が少なく、心理的な部分でのトレーニングが劣っていたことは十分に考えられる。高畑(2008)は、競技力向上の為には自分はこの日のためにやるだけのトレーニングはすべて行ったというトレーニング量と内容、そして成功体験の積み重ねが重要だと述べている。したがって、心理得点で、下位群が、上位群との差を埋めていく為には、トレーニングを継続的に行い、国際試合などを経験する機会を増やし、成功体験を積み重ねる必要がある。

3.5. まとめ

本研究では量的研究として、ブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために、FIFAランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行った。

1) 海外派遣サッカー指導者が赴任先のコーチング環境では、日本と比較して代表チームのコーチング人数、グラウンドの広さ、ゴール

数,観客数などが大きな違いであった。したがって,ブータン同様,アジア貢献事業の対象国のスタッフ数や施設といったコーチング環境は,日本とは大きく異なることが明らかになった。

2)指導者による選手の競技力(技術・戦術)比率は,ブータン同様,アジア貢献事業の対象国の海外派遣サッカー指導者が,指導している選手の能力は,技術,戦術面で日本よりも劣っていることが明らかになった。

3)指導者による選手の競技力評価4項目の総合得点の結果から,2項目に主効果が認められた。下位検定の結果,体力得点,心理得点では上位群が下位群より有意に高値であった。「体力得点」において,下位群は,各カテゴリーでの学校単位のサッカーやプロクラブチーム下部組織のコーチング環境を構築することである。また,継続したトレーニングを行うことによって体力面を強化することが急務であると考えられる。「心理得点」において,下位群の選手は,サッカーは生活における優先順位が低く,トレーニングを継続的に行っていないため,「心理得点」においても「体力得点」との関係から高値になったと考えられる。したがって,下位群は,継続的なトレーニングやゲームに参加することによって,トレーニングの優先順位が上がり,国を代表して戦うプライドも芽生えてくると考えられる。

4)指導者による選手の競技力評価全項目ごとの得点の下位検定の結果から,技術得点1項目,体力得点2項目,心理得点1項目において,上位群が中位群や下位群より有意に高値であった。したがって,下位群が,上位群との差を埋めていく為には,技術得点は,育成年代から,基礎的なトレーニングを多く実施する必要がある。体力得点は,ボールトレーニングなどのサッカー競技の特異性の原則を考えた体力強化を図る必要がある。心理得点は,トレーニングを継続的に行い,国際試合などを経験する機会を増やし,成功体験を積み重ねる必要がある。

第 4 章

海外派遣サッカー指導者の
異文化体験とレジリエンス

4.1.はじめに

第2章から、ブータンのスタッフ数、施設などのコーチング環境および選手の競技能力などにおいて、日本とは大きく異なることが示唆された。さらに指導者は異文化において、それぞれの時期に様々なストレスを抱えることが明らかとなった。3章においても、ブータン同様、アジア貢献事業の対象国のスタッフ数や施設といったコーチング環境は、日本とは大きく異なることが明らかになった。さらに選手の競技能力においては、ランキング下位群は上位群に比べ体力得点と心理得点において劣っていることが明らかになった。他に、技術得点でも「簡単にボールを奪われない」という項目においては上位群と下位群に違いが見られた。

このことから、ブータンなどの下位群で指導している海外派遣サッカー指導者は、コーチング環境や選手のレベルや意識が低いため、そのことを自分でコントロール出来る範囲内のものとして認めることができない状態になると考えられる(カレン・ライビッチら, 2015)。また、海外派遣サッカー指導者は、直面している困難に直視できず、環境面や選手などの他者的な責任転嫁に陥りやすく、状況に対する不満は、怒りに結びつく傾向にあると考えられる(石田ら, 2013)。

したがって、このようなコーチング環境下で指導している海外派遣サッカー指導者は、選手以上に自分自身のメンタル面と向き合い、ストレスマネジメント能力が必要になる(岡澤, 2009)。世界各国の指導経験があるスチュアート・バクスター(1996)は、諸外国で指導する場合、その国の国民性、スタイルにあった指導方針が必要であると述べており、自分のメンタルと向き合うことが多いと考えられる。また、Cicchetti and Garmezy(1993)は、歴史、文化、宗教、習慣や生活環境が全く違う異国の中での環境下において困難に直面した時、失敗や試練に負けなたくましさ、レジリエンスが必要不可欠と述べている。レジリエンス(resilience)とは、元々はストレス(stress)とともに物理学の用語であった。ストレスとは、個人の資源を越え、心身の健康を脅かすものとして評価された人間と環境とのある特定な関係と定義している(Lazarus, 1966)。レジリエンスは、それに対して“外力による歪みを跳ね返す力”として使われ始め(岡野, 2009)、精神医学では、“極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持することが出来る能力”という定義が用いられることが多い(加藤ら, 2009)。

現代の日本の社会においても、急速にグローバル化が進んでおり、多くの企業では変化対応力が求められ、海外から日本を訪れて働く人が年々増えている。それは、変化にオープンになることを意味し、多様性に柔軟に対応し、国籍を超えて活躍する人材がますます必要とされてくる。このグローバル化へ対応するためには、英語力やビジ

ネススキルだけでは充分ではなく、失敗や試練に負けなたくましさ、レジリエンスが必要不可欠となる(久世, 2014)。したがって、国籍を超えて活躍する海外派遣サッカー指導者においても、多様性に柔軟に対応し、失敗や試練に負けなたくましさ、レジリエンスが必要不可欠であると考えられる。このレジリエンスを競技スポーツに置き換えて考えると、指導者が指導する選手の場合、重篤なスランプを乗り越え、目覚ましい活躍をする選手が存在し、それらの選手がどのように困難と向き合い、克服していく能力として捉えることが出来る(久世, 2014)。

近年、競技スポーツにおけるレジリエンスの先行研究では、指導者の事例は少ない。選手の実例を取り上げた渋谷(2010)の研究では、運動部活動やスポーツクラブにおける活動において、ネガティブな出来事として、敗北や挫折、人間関係における悩みなど、比較的誰もが経験し得ることであると述べている。つまり、ネガティブな経験がレジリエンスを向上させる“場”になり得る可能性を示唆している。また、今村ら(2013)は、競技スポーツにおいては、試合の中で不利な状況の中でも、それを乗り越え、結果を出すことが求められる。このことから、競技スポーツを行っている学生と競技スポーツを行っていない学生を比較検討した。その結果、競技スポーツを行っていた学生の方が、競技スポーツを行っていない学生よりもレジリエンス能力を示す得点が有意に高いことを実証した。特に、競技スポーツを行っていた学生は、ソーシャルサポート因子や自己効力感因子に有意な差が見られた。そのことから、競技スポーツを行うことによって問題解決や自律性が養われ、スタッフや仲間からのサポートを受けていると考えられる(渋谷, 2010)。したがって、全国大会出場レベル以上のアスリートとしてスポーツを経験した指導者は、すでにレジリエンス能力が養われ、レジリエンス能力をもともと持ち得ていると推察される。しかし、これらの量的な先行研究では、主に「数値」を使い、複数のサンプルからデータを収集してから、事象を数量化し、統計的に分析する研究方法である。したがって、この研究方法では、現象を数値に置き換える必要があり、微細な現象まで網羅して捉えることが難しい。

海外派遣サッカー指導者として、代表チームを指揮する場合、競技スポーツ文化は、非日常的で特異的である。さらには、異国の地に赴任してから国際大会まで、時間の経過にともなって指導する状況が変化していくものである。海外派遣サッカー指導者の非日常的で特異的なレジリエンス体験を捉えるためには、指導者の取り巻く社会や文化の様相、時間の概念が非常に大切だと考えられる。したがって、海外派遣サッカー指導者の場合、インタビューや参与観察によって得られた基本的に言語データを利用して、個々の事例の生のあり

ようを出来るだけ損なわないで記述することが出来る質的研究の TEM が有効であると考えられる (Valsiner, J and Sato, T, 2006). TEM は, 人間の経験を, その時間の変化と文化, 社会的文脈との関係の中で捉え記述するための方法論的枠組みである. TEM ではある行為や選択を, 等至点としていったん焦点化し, 時間経過を重視しながら多様性を記述していく. 等至性の概念では, 人間及びその生活を取りまく外界や環境との交換関係抜きには存立しえない開放システム (open system) として捉えられる. また, 開放システム (open system) は, 発達における時間的変化と社会や文化との関係性の中で, 人の行動や選択の経路は複数存在すると考えられる. しかし, 人の行動や選択の経路は, どこまでも自由に選択や行動が出来る. また, 末広がり的に径路が存在するというわけではなく, 歴史的, 文化的, 社会的に埋め込まれた時空の制約によって, 時間とともに変化しない定常状態に等しく到達する存在とされる (安田, 2005).

TEMを用いた競技スポーツの先行研究では, 林ら (2012) が, 2度のオリンピックに出場したオリンピックを対象に, それぞれ個人の体験の経路が複数存在し収束する2度目のオリンピック出場 (等至点) の定常状態に等しく到達した時の選手たちの心理状態と試合に臨む際の心理的サポートについて検討している. また, 豊田 (2012) は, 元オリンピックを対象にキャリアトランジションプロセスにおいて, さまざまな人生選択や行為について共通性と固有性, 多様性といった観点から捉えた. オリンピアンが, それぞれ個人の体験が収束する自分らしさの感覚 (等至点) と自分らしさの混乱 (等至点) の中で定常状態に等しく到達した. その結果から, (1) 引退に向き合い, (2) 現役に折り合いをつけ, (3) 次のキャリアに移行し, (4) つながっている感じを見出し, (5) 積極的に取り組む, という発達課題に直面するという知見を導き出した.

しかし, これまで指導者として, 海外で代表チームを国際大会で指揮し, 時間の経過にともなって指導する状況の変化や取り巻く社会や文化の様相, 時間の概念を独自のレジリエンス体験として捉えた研究はまだ行われていない. そこで, 本研究では, 質的研究によって競技スポーツに着目し, 下位群による初めて海外派遣サッカー指導者の語りから得られた異文化体験を TEM によって可視化された指導におけるレジリエンスを検討することとした.

4.2. 方法

4.2.1. 対象指導者

Valsiner and Sato (2006) の TEM の概念の 1 つに, 関心を持った自分や他者の経験の意味を知るためには, あるいは, ある現場において

何が起きているのかを知るためには、そこに焦点を当てたサンプリングが必要である。サンプリングは、その経験や現象をすくいとるために、個人をその歴史とともに考える歴史的構造化サンプリング (Historically Structured Sampling:以下、HSS とする)に基づいている。調査対象として①3年以内の赴任期間でアジア貢献事業に所属している指導者であり、②下位群による初めての海外代表チーム監督経験者であり、③2回の国際大会を経験した指導者の3つを選定条件とした。その理由は、アジア貢献事業として海外派遣された指導者を人間開放システムとして捉えるのであれば、指導を継続したいと考える個人の経験のなかにそれぞれ個人の体験の経路が複数存在する。しかし、しだいに体験の経路が収束する同じような類似の出来事が現れる。そして、その体験がアジア貢献事業として同一の所属であればより顕著であり、所属の様相、社会からの影響を受けやすいといえるため、選定条件①を設定した。また、②の選定条件を設けた理由として、異文化の海外で代表チームを指導する。そのことによって、困難に立ち向かう自信などの自尊心や自分でも出来るという自己効力感に多大に影響を与える可能性があると考えられる。しかし、下位群による初めての海外指導であれば、さらに大きな影響があると考えられるために設定した。③の選定条件を設けた理由として、経験豊富な指導者の語りを分析対象とすることが適切であり、1回目の国際大会から2回目の国際大会までの指導者の心理的変容を捉えるためである。選定条件に該当した指導者の中でインタビュー調査に承諾した下位群の3名(A, B, C)を対象指導者(以下、指導者とする)として調査を実施した。3名の指導者のTEMによる質的研究は、たとえ指導者の人数が増えたとしても分析が雑になるおそれがあり、単純に多ければ多いだけよいとは言えない。そこで、サトウ(2009a)は、「1・4・9・・・の法則」の経験則を提唱しており、1人、4±1人、9±2人、16±3人、25±4人という具合に異なる質を生み出しうるというものである。4±1の経験則は、誰もが経験する通過点を見出すことが容易になり、説得力が増すということや経験の多様性を描くことが出来るために対象者3名を設定した。指導者は、インタビュー調査によって初めての海外派遣でさまざまな困難があった。しかし、指導者の契約の満了時期が近づくにしたがって、活動を継続したいという意思が強くなったと考えられる。調査時期は、指導者の契約が満了し、帰国した期間201X年12月～201X+1年1月であり、実施回数は1回であった。

4.2.2. データ収集

本研究では、基幹質問をあらかじめ準備し、1対1の半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。調査手順として、まず3年以

内の赴任期間中の出来事を想起するために、個人史をフローチャートで表現するライフライン(河村, 2000)の作成を依頼した。その後、作成したライフラインを基に時間の流れに沿って質問し、赴任期間中の体験を聞き取った。基幹質問は、①赴任前の心境、②赴任時の心境、③赴任中の大会前後での心境、④赴任帰国後の心境の4項目であった。さらに、より深い個別性を抽出するために、補足的な質問を適宜加えてインタビューを実施した。インタビュー時間は、Aが97分、Bが124分、Cが94分であり、指導者が指定した場所は、会議室、レストランであった。また、筆者は、インタビュー開始時に指導者の承諾を得てICレコーダーに録音した。なお、指導者の年齢、性別、調査日時、ライフラインについては個人情報秘匿する目的から呈示しない。

4.2.3. 複線経路・等至性モデル(TEM)の概念説明と本研究における位置づけ

TEMの概念説明と本研究における位置づけを表している(Table4-1)。

Table4-1 TEMの概念説明と本研究における位置づけ

概念	意味	本研究における位置づけ
歴史的構造化サンプリング (Historically Structured Sampling:HSS)	等至点として定めた行為や選択を個人的なものとして捉えるのではなく社会的・歴史的に構造化されているものを考え、等至点に着目をしてサンプリングを行う	①アジア貢献事業に所属している指導者 ②初めての海外代表チーム監督経験者 ③2回の国際大会を経験した指導者
等至点 (Equifinality Point:EFP)	多様な経路の経路がいったん収束する地点	アジア貢献事業継続口
両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point:P-EFP)	等至点を1つのものとして考えるのではなく、それと対になるような補集合的な事象も等至点として研究に組み入れられることである。	日本のクラブで指導
必須通過点 (Obligatory Passage Point:OPP)	理論的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるを得ない地点	制度的必須通過点 理事会で決定 結果的必須通過点 1回目の「国際大会出場」 2回目の「国際大会出場」
分岐点 (Bifurcation Point:BFP)	複線経路を可能にする結節点(ノード)	1回目の岐路 2回目の岐路 3回目の岐路
社会的方向づけ (Social Direction:SD)	個人の選択に有形無形に影響を及ぼす諸力を象徴的に表したもの	就労ビザ取得による影響 強化システムによる影響 宗教上の行事による影響 チームサポートによる影響
社会的ガイド (Social Guidance:SG)	SDに対抗し、活動を続ける方向へと誘導する環境要因や文化・社会的支え	家族の理解とサポート 赴任先サッカー協会のサポート 赴任先日本人によるサポート

1)等至点(Equifinality Point:以下、EFPとする)

本研究では等至点(EFP)をアジア貢献事業の継続することに設定し、そこに向かう個人の体験を可視化した。等至点とは多様な経路がいったん収束する地点であり、TEMはこの等至点に着目してサンプリングを行う。そして、TEMは歴史的構造化サンプリング(HSS)とともに理解する必要がある(Valsiner, J and Sato, T, 2006)。歴史的構造

化サンプリング(HSS)では,等至点として定めた経験を個人的なものとして捉えず,個人が生まれた場所,文化,歴史の影響を受けて,構造化されていると考える.そして,人間の経験を等至点として概念化し,その経験をした対象に等至点に至るまでの多様な選択やその後の選択について考察する(サトウ,2009b).

2)両極化した等至点(Polarized Equifinality Point:以下,P-EFPとする)

サトウ(2009a)は TEM 図の作成にあたって,両極化した等至点(P-EFP)を設定することを推奨している.両極化した等至点とは,等至点を1つのものとして考えるのではなく,それと対になるような補集合的な事象も等至点として研究に組み入れられることである.この両極化した等至点は語られていない事象を描く場合もある.例えば,本研究ならばアジア貢献事業を継続すること,日本のクラブで指導をすることの両極化した等至点を設定する.そうすることで,日本のクラブで指導をすることに至る仮想的な経路を描き入れることが可能となり,語られたアジア貢献事業の継続する等至点の径路を明確に示すことが可能となる.

したがって,両極化した等至点を設定することで,日本のクラブで指導するという選択ができたのにも関わらず,なぜ指導者がアジア貢献事業を継続することを選択したのかについて考察を深めることが可能となる.

3)必須通過点(Obligatory Passage Point:以下,OPPとする)

TEM の概念のひとつに必須通過点(OPP)がある.必須通過点とは,ほとんどの人が通る点のことを指すが,本研究の必須通過点はサトウ(2009a)に準じて制度的必須通過点と結果的必須通過点の2つの側面を設定している.制度的必須通過点は,制度的に存在し,典型的には法律で定められているようなものである(サトウ,2009a).したがって,制度的必須通過点は,体験したほとんどの指導者であれば,通らざるを得ない過程であり,制度的にもこれらの道を通る必要があるため理事会で決定することに設定した.結果的必須通過点は,制度的でも習慣的でもないにもかかわらず,多くの人を経験する天災や戦争などの大きな社会的出来事などである(サトウ,2009a).したがって,結果的必須通過点は,チームの大きな転換期である.そのため1回目の国際大会出場と2回目の国際大会出場に設定した.

4)分岐点(Bifurcation Point:以下,BFPとする)

TEM 実現の概念では,可能な複数の経路が用意されている.複線経路を可能にする結節点(ノード)のことを分岐点(BFP)と呼ぶ.分岐点(BFP)は転機概念に近似しているが,転機のように重大な意味を持たせない.転機のような表現は,ある一つの事象に断絶的あるいは急激的な変化といった意味合いを持たせてしまう傾向がある.日常で

は、転機があったという言い方は一般的であり、そのように思える出来事もあるかもしれないが、TEM では転機ではなく分岐点(BFP)という位置づけをする。これは、ある経験の絶対性を失わせることになるが、大きな負の出来事があったとしても、それに対する回復を可能にする見方である(サトウ, 2009a)。したがって、赴任直後の心境の変化によって活動を継続するか、活動を取りやめて帰国する選択が考えられた。そのため、1 回目の分岐点を継続すると帰国するに設定した。また、1 度目の国際大会出場の結果によって活動を継続するか、活動を取りやめて帰国する選択が考えられた。そのため 2 回目の分岐点を継続すると帰国するに設定した。その後、2 回目の国際大会出場を終え、帰国後にアジア貢献事業の活動を継続するか、日本での指導を選択することが考えられた。そのため 3 回目の分岐点を継続すると日本での指導に設定した。

5) 非可逆的時間(Irreversible time)

TEM は、文化心理学のパラダイムをなし、人間を時間と共に扱うことを重視する。現在までスポーツ心理学領域では TEM を使用していなかった。しかし、アジア貢献事業継続に向かう経験がその個人の発達と捉えるのであれば、時間を捨象したモデルでは個人の発達を十分に表しきれない。したがって、人間が時間と共にあるようなモデルを作る必要がある。TEM では、縦の次元を時間と表しているが、何らかの基準線を表現しているわけではない。図には、下から上へと非可逆的時間を示す矢印(→)を描くが、具体的な時間の長さは書きいれない。時間を単位化したりせず、ただ質的に持続しているということのみが重要だということを示している(サトウ, 2009a)。

4.3. 結果

4.3.1. 事例の提示

3 名(A, B, C)の指導者のインタビュー調査から得られた語りを時系列ごとに記述した。

以下文中の<>は、TEM 図(Figure4-1)のポジティブな心理的感情、ネガティブな心理的感情グループとイベントにある囲みの部分を表している。[]は、社会的方向づけと社会的ガイドであり、()は<>と[]の本研究における位置づけを示している。また、[A][B][C]は、それぞれの指導者を表し、「」は、その指導者の語りから得られた内容を表し、“”は強調を示す。

1) 指導者[A]

[A]は、サッカー選手として 14 年間プレーし、指導者としても、10 年の経験がある。また、J リーグでの経験から海外出張も豊富であった。[A]は、以前から、海外で仕事をしたいという気持ちがあり、指導

の経験や語学力のレベルアップなどを考えていた。クラブの契約満了とアジア貢献事業の公募のタイミングがうまく一致し、家族とともに海外に赴任し、現地で指導することになった。赴任当初、[A]は、新しい新天地での仕事への意欲と語学力の向上のためにやりがいを感じていた。しかし、就労ビザ取得のために何回も帰国しなければいけなくなり、指導できない苛立ちや選手のレベルや意識の低さに戸惑いを感じ始めていた。[A]が出場した1回目の国際大会は、大量失点するなど、大会の惨敗によって心境的に追い込まれた状況であった。しかし、[A]は、家族の理解とサポートによってチーム再出発に向けて、気持ちの切り替えることが出来た。また、[A]は、1回目の国際大会の反省を生かして、トレーニングや選考会の改善、大会前の日本遠征を行った。そのことによって、チームが飛躍的によくなり、2回目の国際大会において、育成年代の代表チームとして初めて1勝を挙げることが出来た。

2) 指導者[B]

[B]は、サッカー選手として14年間プレーし、指導者としても、18年間の経験がある。[B]は、過去にスペインでの赴任の経験があり、以前から、海外での生活にも慣れていていた。

[B]は、東日本大震災によって所属先のクラブが消滅した。そのことによって、海外での指導がしたいという気持ちが高まり、家族を日本に残して単身で赴任することになった。[B]は、選手やスタッフの意識やレベルの低さに戸惑うことが多かった。しかし、なんとかこの国のサッカーを変えなければという強い意志を持ち続けた。[B]が出場した1回目の国際大会出場では、全敗したものの、強豪国と互角に戦う試合もあった。協会幹部からも高い評価を得た。しかし、[B]が出場した2回目の国際大会出場では、大会前の国外合宿でのトレーニングゲームのマッチメイクの不手際やスタッフの非協力的な言動によって、チームも良い結果を得ることが出来なかった。

3) 指導者[C]

[C]は、サッカー選手として25年間プレーし、指導者としても、6年の経験がある。所属するクラブで契約を継続することが可能であったが、以前から海外での指導を考えていた。[C]は、アジア貢献事業の公募のタイミングがうまく一致し、家族を日本に残して単身で指導することになった。赴任当初、[C]は、語学の向上や新しい環境で高いモチベーションを維持していた。しかし、選手の意識やレベルの低さ、チーム内での規則やルールが守れない選手に対しての苛立ちがあった。[C]が出場した1回目の国際大会出場では、以前から結成していたチームでもあった。そのため、完成度が高く良い結果を得ることが出来た。[C]が出場した2回目の国際大会出場では、選考会で選ばれた選手の移籍が思うようにいかなかった。また、指導に対する親への関

与, 宗教行事によるトレーニングの制限などがあり困惑した. しかし, 大会では, [C]が目標としていた結果に到達し, 満足感と安堵感を得ることが出来た.

4.3.2. TEM 図の作成

3名の指導者によって得られたデータをもとに, 作成した逐語録を繰り返し精読し, 全体像を把握した. その後, 得られたデータは, 事例ごとに川喜田(1967)のKJ法に準じて, 逐語録の最初から順に意味のまとまりごとの単位に断片化した. その内容を端的に表す見出しをつけ, カードに記載した. 次にカードに記載した内容は, そのまとまりを模造紙上に時系列に並べ, 関係図をTEMによって可視化した(Figure4-1).

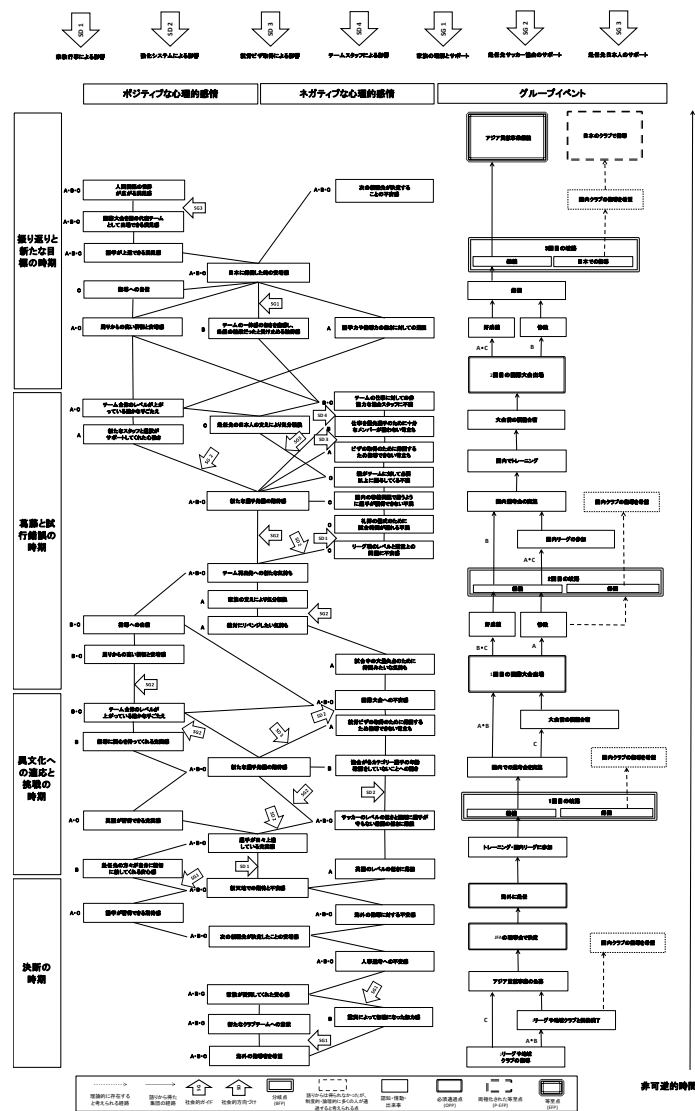


Figure4-1 海外派遣サッカー指導者の異文化体験とレジリエンスの体験プロセス

4.4. 考察

3名の指導者の出来事を表したグループイベント (Figure4-1)に伴う心理的变化を捉える場合、ニコルソン (Nigel Nicholson) が提唱した4段階から成るキャリア・トランジション・サイクルが考えられる。このサイクルはモデル化され、各段階における課題や、適応のための方策、役立つ理論などが包括されている (Nicholson, Nigel and Michael West, 1988; Nicholson, Nigel, 1990)。したがって、キャリア形成のプロセスを4段階のサイクルから捉えた場合、①新しい世界に入る準備 (preparation) 段階として決断の時期、〈Jリーグや地域クラブの指導〉から〈海外に赴任〉(OPP) 前、②実際にその世界に初めて入っていき、様々な新たなことに遭遇する (encounter) 段階として異文化への適応と挑戦の時期、〈海外に赴任〉(OPP) 後から〈1回目の国際大会出場〉(OPP) 前、③新しい世界に徐々に溶け込み順応 (adjustment) していく段階として葛藤と試行錯誤の時期、〈1回目の国際大会出場〉(OPP) 後から〈2回目の国際大会出場〉(OPP) 前、④もうこの世界は新しいとはいえないほど慣れて、落ち着いていく安定化 (stabilization) 段階として振り返りと新たな目標の時期、〈2回目の国際大会出場〉(OPP) 後から〈アジア貢献事業継続〉(EFP) として設定した。

次に、グループイベントに伴う心理的变化の中で、人の感情の中に、元気で活動的で生き生きとした状態であるポジティブ感情と元気がなく消極的で自分や周りのことに否定的なネガティブ感情というものがある。ポジティブ感情 (PA) は、我々の幸せや幸福感、ポジティブな誘意性と高い活性化 (覚醒感) によって特徴づけられた情緒的な状態のことであり、高い覚醒感をともなう快感情を指す。ネガティブ感情 (NA) は、怒り、悲しみ、恐れなどがある。「怒り」は、攻撃行動に伴う感情であり、「恐れ」は、逃避行動に伴う感情であるというように、ネガティブ感情は行動との関係が明確である (阿久津ら, 2008a)。この2つの感情は、ある感情連続次元の両端にあると観ることが出来るが、近年の多くの研究は、ポジティブ感情とネガティブ感情が独立していることを示唆することから (Watson, D. Clark, L. A & Tellegen, A., 1988; Folkman, S., 1997; Van Yperen, N. W., 2003; 阿久津, 2008b; 山崎, 2006), グループイベントに伴う指導者のポジティブとネガティブの心理的感情を独立して設定した。

また、指導者のポジティブとネガティブな心理的变化は、社会的ガイドや社会的方向づけの関係によって大きく影響していると考えられる。社会的方向づけ (Social Direction: 以下, SD とする) とは、選択肢があるにもかかわらず、特定の選択肢を選ぶように仕向けるような環境要因と、それを下支えするような文化社会的圧力である (サトウ, 2009a)。本研究では、[宗教行事による影響] (SD1), [強化システ

ムによる影響](SD2), [就労ビザ取得による影響](SD3), [チームスタッフによる影響](SD4)を社会的方向づけと位置づけた。まず[就労ビザ取得による影響]は, その国の施策や法律によって社会的影響を受けているため設定した。次に[強化システムによる影響]は, その国のサッカー協会のシステムによって社会的影響を受けているため設定した。[宗教行事による影響]は, その国の宗教的な儀式や信仰によって社会的影響を受けているため設定した。[チームスタッフによる影響]は, その国のチームスタッフによって社会的影響を受けているため設定した。

社会的ガイド(Social Guidance:以下, SG とする)とは, SD に対抗し, 活動が続ける方向へと誘導する環境要因や文化, 社会的支えである(安田ら, 2012)。本研究では, [家族の理解とサポート](SG1), [赴任先サッカー協会のサポート](SG2), [赴任先日本人のサポート](SG3)を社会的ガイドと位置づけた。まず, [家族の理解とサポート]は, 海外で指導するときの理解と赴任中精神的な支えになっていたと考え設定した。[赴任先サッカー協会のサポート]は, 指導者が赴任した際やチームが国際大会に向けて選考会, 強化合宿や親善試合などに対するサポートを行っていたため設定した。[赴任先日本人のサポート]は, 赴任先で交流のある日本人がサッカーの指導面や生活面などの悩みなど相談役になっていたと考え設定した。

以下では, 次の 4 つのグループイベントに伴う心理的变化の時期について, それに付随する心理的課題克服の対処方法について記述する。

4.4.1. 決断の時期

指導者は, <Jリーグや地域クラブの指導>をしていた時期から海外で指導したいと願望を抱いていたが, 漠然とした考えだけで, 具体的な方向性は見出せないままであった。しかし, [A]は, <Jリーグや地域クラブと契約満了>になり, 海外の指導に対する気持ちが高くなってきた。[B]は, 震災によって, クラブの活動が不可能になり, 日本で希望するクラブが見つからなかった。そこで, 以前に経験した海外の指導に対して前向きに考えるようになった。[C]は, <Jリーグや地域クラブの指導>をしていた。しかし, 所属しているクラブの仕事よりも海外で指導したいという願望が強くなり<新たなクラブチームへの意欲>を抱くようになった。この段階で, <国内クラブの指導を希望>する選択もあった。しかし, さらなる活躍の場を求めて“海外で指導したい憧れ”を持ち続け, <アジア貢献事業の公募>に挑戦する選択をしたと考えられる。海外派遣サッカー指導者への動機として[A]の場合は, 「契約満了になったことで, 語学力を身に付けることも出来る海外派遣に興味を持ちはじめた」と語っていた。[B]の場合は, 「震

災によって、無職になったことで、家族を養っていかななくてはいけなくなった」と語っていた。[C]の場合は、前述した指導者と異なり、契約が継続可能であったにもかかわらず、「海外で指導したくなった」と語っていた。

また、〈アジア貢献事業の公募〉を選択する際、既婚の指導者にとって[家族の理解とサポート](SG1)は重要な問題でもある。[A]は、「特に問題なく了承してくれた」と語っていた。[B]は、「仕事先を求めている父親に対して、快く理解してくれた」と語っていた。[C]は、「家族で以前から話しが出ていたので、特に問題なく了解してくれた」と語っていた。このように、海外赴任の挑戦に関しては、〈家族が賛同してくれた安心感〉から“自分を支えてくれている家族のため”という他者志向的動機によって(真島, 1995), 決心したと考えられる。

〈アジア貢献事業の公募〉の後、いずれの指導者も落選した場合「再就職先を探さなくてはならない」、「家族が賛同してくれる」という家族への責任感による気持ちから〈人事選考への不安感〉を抱いていたと考えられる。

〈JFAの理事会で決定〉した後、指導者は、〈次の就職先が決定したことの安堵感〉と同時に、赴任までの間、海外で仕事することへの不安感を持ちながらも、[A], [C]は、「語学が習得出来る期待感があった」と語っていた。また、[B], [C]は、赴任先に家族を連れて行く選択を断念し、単身で行くことを決意した。しかし、[A]は、アジア貢献事業の赴任が決定した際、「家族と一緒に海外に赴任することを決めた」と語っていた。このことから、[家族の理解とサポート](SG1)に関して、家族も赴任地での言葉の問題、生活環境、現地事情、文化の差、子育てなど家族は特殊な環境に置かれることになる(下野, 2013)。そのため、かなりの覚悟をもって決断したと考えられる。その後、赴任するまでの間、指導者はJFAでの手続きや現地の情報収集や準備を行っていくうちに、〈新天地での期待と不安感〉が高まっていった。

4.4.2. 異文化適応と挑戦の時期

〈海外に赴任〉(OPP)によって、いずれの指導者も「新天地での期待と不安感があった」と語っていた。[A]は、「語学力のレベルの低さに落胆した」と語っていた。しかし、実際には海外勤務に必要な能力として、語学力だけでなく人間の喜怒哀楽によって、感情を十分理解し、共感する異文化コミュニケーションの能力が必要であると考えられる(友松, 2012)。また、[B]は、「赴任先の方々が自分に親切に接してくれる安心感を得ることが出来た」と語っていた。このことから、[B]は、この時期、[宗教行事による影響](SD1)により日本との異文化の違いに困惑した。しかし、住居の手伝いや書類上の手続きなどによる

[赴任先サッカー協会のサポート](SG2)の親切な対応を受けたことによって、お互いの信頼関係が少しずつ出来はじめ、不安感が取り除かれたと考えられる。

赴任後、指導者は<トレーニング・国内リーグの参加>によって、日本と違う選手の反応、指導に対しての関心の高さから「選手が日々上達している充実感があった」と語っていた。また[A],[C]は、トレーニングを通して「語学が習得出来る充実感があった」と語っていた。この時期の指導者は、“新しい技能を得る”、“技能の正確性を高める”などの学習や理解を通じて能力を高めることを重視する課題目標を与える指導を行っていたと考えられる。選手は、他者との比較によって動機づけられているわけではない。そのため、自分の能力への自信の高低に関わらず、課題に積極的に挑戦し努力を続ける行動パターン(熟達志向型)を示しやすくなる(上淵ら,1995;杉山,2012)。このことから、選手が日々上達している充実感を得ることが出来たと考えられる。しかし、指導者は、トレーニングを重ねていくうちに[強化システムによる影響](SD2)から、「サッカーのレベルの低さと選手が規則を守らない意識の低さに落胆することが多くなった」と語っていた。このことから、指導者は、期待から落胆への気持ちに変わっていったと考えられる。田村ら(2013)は、アジアで働く場合、想像以上に予期せぬ出来事に遭遇する。そのため、問題解決能力が最も大切なスキルの一つだと述べており、日本で活動している以上に自己責任において遂行していかななくてはならないと考えられる。

この時期、指導者は、指導による落胆によって<1回目の岐路>として<継続><帰国>(BFP)の選択が考えられたが、日本を出発した時点で、指導に対する強い決意があったため<継続>を選択している。

指導者の中で少しずつ異文化を理解し、赴任先の生活に慣れ始めてきた時期、指導者は、<国内での選考会を実施>することになった。また、指導者は、[赴任先サッカー協会のサポート](SG2)によって、選考会を実施することによって<新たな選手発掘の期待感>を得ることが出来た。それと同時に、[B]は、[強化システムによる影響](SD2)により、「サッカー協会が各カテゴリー選手の年齢確認をしていないことへの驚きがあった」と語っていた。しかし、その後[B]は、「指導に関心を持ってくれる充実感があった」や「チーム全体のレベルが上がっている確かな手ごたえを感じた」と語っていた。指導者は、トレーニングに参加することによって、海外での寂しさを解消し、社会的スキルを身に付け、気持ちの切り替えが出来ていたと考えられる(久世,2014)。

また、[C]は、<国内での選考会を実施>の後、[赴任先サッカー協会のサポート](SG2)によって、<大会前の調整合宿>を実施することができたために、“調整合宿による充実感”を得ることが出来た。しか

し、[A]は、国際大会前に「就労ビザ取得による影響」(SD3)により、国際大会出場前の大切な時期にも関わらず、1 か月近く帰国しなければいけなくなった。[A]は、「就労ビザ取得のために指導できない苛立ちがあった」、「日本では考えられない出来事によって、どうすることも出来なかった」と語っていた。就労ビザについて横井(2014)は、就労ビザを取得するハードルが、年々高くなってきており、海外に居住する日本人の多くが直面するビザ更新問題で苦慮する。また、日本で考えられない出来事によって、苛立ちや気持ちが沈み込んでいるときは、瞬時に気持ちを切り替えることが大切だと述べている。大野(2014)も、マイナス思考の悪循環を断ち切ってバランスよく現実を目を向ける必要があると述べている。したがって、指導者は、海外での困難に直面した時、如何にマイナス思考を断ち切って、気持ちを切り替えるかが重要だと考えられる。

〈1 回目の国際大会出場〉前のいずれの指導者も、「赴任後、初めて国際大会に出場するという期待より不安のほうが大きかった」と語っていた。[A]は、「国のサッカーの強化システムがしっかりしていなく、国際大会で戦うレベルではなかった」[B]は、「サッカー協会が各カテゴリーの選手の年齢確認を怠っていたため、選手が確定できなかった」[C]は、「昨年 12 月に大会終了後、トレーニングを実施していなかったため、国際大会までの実践の機会が少なかった」と語っていた。このように、いずれの指導者も、「強化システムによる影響」(SD2)による〈国際大会への不安感〉があったと考えられる。高見ら(1999)は、日本とは全く違った環境によって、強化合宿中や国際大会前のストレスが最も高くなり、競技結果に影響を及ぼす危険性があるとしている。特に選手やチームの練習に成果に対する不満や強化の遅れからくる焦りなどが挙げられる(石井ら, 1997)。また、松瀬(2004)は、国の威信を背負う責任といった様々なストレスも抱えていると述べている。

4.4.3. 葛藤と試行錯誤の時期

〈1 度目の国際大会出場〉(OPP)によって、〈好成績〉であった[B],[C]の指導者は、「周りからの高い評価と安堵感を得ることが出来た」と語っていた。一方、〈惨敗〉の結果に終わった[A]は、「試合中の大量失点のために拷問を受けているみたいな気持ちになっていた」と語っていた。〈1 度目の国際大会出場〉(OPP)によって、〈好成績〉であった[B],[C]は、初めて赴任した大会後、結果が出せたことによる〈指導への自信〉を得ることが出来た。〈惨敗〉の結果に終わった[A]は、異国の地でのマスコミや周りからの非難や中傷を受け「絶対にリベンジしたい気持ちがあった」と語っていた。石井ら(1997)によると、マスコミ、報道が指導者に多大な影響を与えることを指摘している。

そのために、指導者自身が、“自分たちのペースを守ること”、“マスコミに理解を求める”、“指導者の団結”などの対処法が必要であると述べている。したがって、指導者は、試合の結果によって、異国の地でのマスコミや周りからの非難や中傷に対して、しっかりとした対応が必要であると考えられる。

この時期、〈1 回目の国際大会出場〉(OPP)の結果によって、〈2 回目の岐路〉として〈継続〉〈帰国〉(BFP)の選択が考えられたが、指導者は、このままでは終わることはできないと強く感じ、〈チーム再出発への新たな気持ち〉を持ちながら〈継続〉を選択している。特に、[A]は、心境的に追い込まれ、投げ出したくなる気持ちの時、「家族の支えにより、気分転換することができた」と述べ、[家族の理解とサポート](SG1)の影響が大きかったことを語っていた。久世(2014)は、家族や友人は、困難な体験をして精神的に落ち込んでいるときに、早期に立ち上がるために必要な叱咤激励してくれる存在だと述べている。したがって、[A]の場合、大会の惨敗によって心境的に追い込まれた状況の中で家族の理解とサポートによってチーム再出発に向けて、気持ちの切り替えが出来たと考えられる。

〈チーム再出発への新たな気持ち〉から〈継続〉を選択した指導者は、〈2 回目の国際大会出場〉(OPP)に向けて、課題や目標を設定し新たな気持ちでトレーニングを再開した。しかし、[C]が所属している国内リーグ戦は、[強化システムによる影響](SD2)によって「リーグ戦のレベルと運営上の問題に不安感を抱くことが多かった」。また、[C]は、[宗教行事による影響](SD1)により「国内のリーグ戦中、宗教上の儀式を行うために試合時間が大幅に変更された」と語っており、そのため、指導者にとって、試合に向けてのモチベーションにも影響があったと考えられる。宗教上行われる断食は、「トレーニングや試合中において、エネルギーを供給するタイミングが難しかった」と語っており、選手のパフォーマンス発揮においても大きな影響を及ぼされたと考えられる。こうした異文化に関して、友松(2012)は、相手との誤解や対立があれば、その原因を現地の経済的、社会的、文化的背景から考えることである。また、日本人のもつローカルマインドを保ちつつ、それを包摂する柔軟な発想と行動様式を身に付けることが大切だと述べている。

指導者は、〈2 回目の国際大会出場〉(OPP)に向けて[赴任先サッカー協会のサポート](SG2)によって〈新たな選手発掘の期待感〉を抱きつつ〈国内での選考会を実施〉した。しかし、選考会后、[C]は、「国内の移籍問題で思うように選手が獲得できない不満があった」、「学校の試験期間中に練習できない不安感があった」、「親がチームに対して必要以上に関与してくる不満があった」と語っていた。こうした[C]による練習できないなどの不安感などの問題について、石井ら

(1997)は、“トレーニング時間の工夫”，“プラス思考”などの対処方法があると述べておりいる。[C]は、こうした問題の解決策として、友人と食事やドライブに出かけるなど[赴任先日本人のサポート](SG3)によって、プラス思考に変えていったと考えられる。

また、この時期[A]は、〈国内での選考会を実施〉の後、選考したメンバーのトレーニングを開始した直後、[就労ビザ取得による影響](SD3)により、日本に一時帰国することになった。そのことによって、[A]は、トレーニングを継続的に指導できない状況下の中でも、監督としての責任と任務を果たしていかなくてはならない状況に追い込まれていたと考えられる。しかし、[A]は、赴任先に帰国してから、今までの遅れを必死で取り戻すためにトレーニングを再開し、〈2回目の国際大会出場〉(OPP)に向けて赴任先のサッカー協会と準備を進めていた。その際、[A]は、[赴任先サッカー協会のサポート](SG2)によって、〈大会前の調整合宿〉から、「新たなスタッフと通訳がサポートしてくれた心強さがあった」、「チーム全体がレベルアップしている確かな手ごたえを感じる事が出来た」と語っている。したがって、[A]は、1回目の国際大会の経験を活かし、国際大会による結果や就労ビザ取得などのストレスを受け精神的に落ち込んだとしても、家族との会話などの気分転換を行うことを学んだ。そして、[A]は、自分の感情をコントロールし、自分の身のまわりに起こっている状況を冷静に捉え、〈2回目の国際大会出場〉(OPP)に向けて堅実に行動したことによって状況が好転したと考えられる(吉村, 2007)。

一方、[B]は、国外合宿の際、[チームスタッフによる影響](SD4)によって、「チームの仕事に対して、非協力的なスタッフに対しての不満があった」や「練習試合のマッチメイクの失敗による苛立ちを感じていた」と語っていた。また、[B]は、選手に対しても、「仕事を優先する選手によってメンバーが揃わない苛立ちを感じていた」と語っていた。高見ら(1999)は、国際大会前の指導における状況下において、指導者、スタッフ間のトラブルが最も多かったと述べている。また、高見ら(1999)は、選手のまとめ、指導法やコーチング、選手の怪我や調整、遠征時のチーム環境の調整等によるストレスは多岐に渡って報告されていると述べている。これらの対処方法に関して石井ら(1999)は、“会議を数回実施してコンセンサスを求め合う”，“妥協、逃避することなく納得するまで話し合う”，“強化方針には一切口を挟まない”などが考えられると述べている。また、橋本ら(2008)も、葛藤が生じた時には、コミュニケーションにより問題を解決していることを示している。このことから、これらの国際大会前の指導における状況下において、コミュニケーションは非常に重要だと考えられる。

4.4.4. 振り返りと新たな目標の時期

<2 回目の国際大会出場>(OPP)によって、<好成績>であった[A],[C]は、「周りからの高い評価と安堵感」や対戦カード順に恵まれた幸運な気持ちもあった。[C]は、大会後、結果が出せたことによる<指導への自信>を得ることが出来た。しかし、[A]は、好成績だったにもかかわらず、「語学力や指導力の無力さに落胆した」と語っていた。Weiner, B. (1972)の原因帰属の理論から考察すると[A]は、<1 回目の国際大会出場>(OPP)の<惨敗>の結果によって、心境的に追い込まれた状況の中で、[家族の理解とサポート](SG1)によって、チーム再出発に向けて、気持ちの切り替えが出来た結果、<好成績>を得られたと考えられる。[C]は、<2 回目の国際大会出場>(OPP)に向けての選考会后、[強化システムによる影響](SD2), [宗教行事による影響](SD1)などの問題があった。その解決策として、友人と食事やドライブに出かけるなど[赴任先日本人のサポート](SG3)によって、ポジティブな気持ちの切り替えが出来た結果、<好成績>を得られたと考えられる。

一方、<惨敗>の結果に終わった[B]は、[チームスタッフによる影響](SD4)から、「チームの一体感の無さを痛感し、当然の結果だったと受け止め納得感を持っていた」と語っていた。久世(2014)は、失敗の体験を“予防出来る失敗”，“避けられない失敗”，“知的な失敗”と分類し、失敗は、自責の念を持たないことだと述べている。したがって、[B]は、コミュニケーション不足などの“予防出来る失敗”，“知的な失敗”など、今後の具体的な解決策として前向きに捉えることが出来ていたと考えられる。

<2 回目の国際大会出場>の後、<帰国>した指導者は<日本に帰国した時の安堵感>を得ていた。帰国後に得られた指導者の語りでは、多くのストレスを抱えたにもかかわらず、ネガティブに捉えていなかった。むしろ、いずれの指導者も「この経験によって得られた満足感や自信を感じ取ることが出来た」と語っていた。

このことから、指導者が経験した<1 回目の国際大会出場>(OPP)の達成結果に対して、選考会やトレーニング、強化方針などの見直しや改善を行った結果、ポジティブな心理的変容が見られたと考えられる。Richard G Tedeschi(1998)は、心的外傷後ストレス障害(Post Traumatic Stress Disorder:以下 PTG とする)を、非常に挑戦的な人生の危機で、もがき奮闘した結果起こるポジティブな変化の体験と定義している。この定義に基づき、以上のような調査結果を考察すると、本研究の調査対象となっている指導者は、家族や友人などの“深い人間関係”，国際大会などの経験による“新しい価値観”，大きな困難を乗り越える“自己の強さ”を認識することが出来たと考えられる。

その後、指導者は、〈3 回目の岐路〉としてアジア貢献事業の〈継続〉〈日本での指導〉(BFP)によって選択をする岐路になるが、海外派遣によって得られたポジティブな変化の体験によって〈継続〉を希望する選択をした。アジア貢献事業継続を希望する理由として、日本での就職先が困難であると予想した。そのために、継続を希望した指導者も存在したが、〈人間関係が広がる満足感〉や〈国際大会に国の代表チームとして出場出来る満足感〉、〈語学が上達出来る満足感〉などであった。Bridges, W. (1980)によれば、とても重要な終わり(終焉)から、次のことが始まる(開始)までの間、人は中立圏(natural zone)という時期を経験することがあると述べている。その中立圏が次のキャリア(開始)に向けてもつ意味合いについて、金井(2010)は、後ろ向きで消極的な段階ではない。むしろ積極的なものだと評価し、慣れ親しんだもの、去りつつあるものを深く直視しながら、ある新しく突入する世界に気持ちを向ける時期であると述べている。また、金井(2010)は、混乱と苦悩の中を押し進むことで、新しいドアを開けて、さらに一歩を踏み出すための新たなエネルギーを充填することであると述べている。この中立圏の時期は、指導者がキャリアにおける個人ニーズを明確にし、キャリアの方向性を明らかにする上で有効であると考えられる。

指導者がアジア貢献事業の〈継続〉の方向性を明らかにした背景において、Edgar H. Schein(1975)が示した、キャリア・アンカーモデル(Career Anchor Model)の8つタイプから考察することとした。その結果、課題達成に向けて集団の力を結集し、対人関係を処理し、周囲の期待に応じてリーダーシップを発揮し、組織の階層を上っていくことに喜びを感じるタイプである全般管理コンピタンス(General Managerial Competence)、新しいものを作り出し、リスクを恐れず、障害を乗り越える能力を発揮することに張り合いをもつタイプである起業家的創造性(Entrepreneurial Creativity)、個人や家族の要望、仕事と家庭のバランスを大事にして、全体性との調和を考え、仕事を考えようとするタイプである生活様式(Lifestyle)、解決が困難に見える問題の解決や強い相手に勝つことにやりがいを感じ、目新しさ、難しさ、競争に関心をもつタイプである純粋な挑戦(Pure Challenge)の4つのタイプに該当し、自分らしい新しいキャリアをつくり上げられたと考えられる。

4.5. まとめ

本研究では、指導者を対象にインタビュー調査を実施し、TEMを用いて指導者の体験を可視化した。その結果、指導者のグループイベントに伴う心理的变化をキャリア形成のプロセスの4段階サイクルから捉えた場合、海外派遣サッカー指導者の詳細な実態が明らかにな

った。

1) 決断の時期では、アジア貢献事業の公募の後、いずれの指導者も落選した場合、再就職先を探さなくてはならないストレスや家族への責任感による気持ちから人事選考への不安感を抱いていた。赴任決定後、指導者は JFA での手続きや現地の情報収集や準備を行っていくうちに、新天地での期待と不安感が高まっていった。

2) 異文化適応と挑戦の時期では、赴任時、いずれの指導者も新天地での期待と不安感があった。しかし、指導者は、トレーニングを重ねていくうちに、サッカーのレベルの低さと、選手が規則を守らないという意識の低さから、落胆の気持ちに変わっていった。また、1 回目の国際大会出場前、大切な時期にも関わらず、就労ビザ取得の影響による問題から、1 か月近く帰国しなければいけない事態にストレスを感じた指導者が存在した。このことから、指導者が、日本では普段から当たり前前に考え、実施していたことが、赴任先では全く機能しなくなったことによって、心理的ストレスが大きくなった。

3) 葛藤と試行錯誤の時期では、1 回目の国際大会出場によって、惨敗の結果に終わった指導者は、異国の地でのマスコミや周りからの非難や中傷を受け、大きなストレスを感じた。また、指導者は 2 回目の国際大会出場前に、国内の移籍問題で思うように選手が獲得できない強化システムによる影響や、国内のリーグ戦中、宗教上の儀式を行うために試合時間が大幅に変更されたこと、またチームの仕事に非協力的なスタッフがいたことによって、大きなストレスを感じた。

4) 振り返りと新たな目標の時期では、指導者が 2 回目の国際大会出場し、帰国した後の時期であった。帰国後の指導者は、多くのストレスを抱えたにもかかわらず、海外派遣先での経験をネガティブに捉えていなかった。むしろ、いずれの指導者からもこの経験によって得られた満足感や自信を感じ取ることが出来た。このことから、本研究の調査対象となっている指導者は、家族や友人などの“深い人間関係”、国際大会などの経験による“新しい価値観”、大きな困難を乗り越える“自己の強さ”を認識し、非常に挑戦的な人生の危機で、もがき奮闘した結果起こるポジティブな変化の体験をした。

第 5 章

総括と展望

5.1. 本研究のまとめ

本研究では、海外派遣サッカー指導者の実態を明らかにすることを目的とした。具体的にはコーチング環境の特徴を明らかにすることと、同時にそこで指導者が体験する異文化での心理的変容過程を探求することを研究課題とした。

本研究において得られた構成の結果は、以下の4点にわけて要約出来る(Figure5-1)。

第2章ではブータンのスタッフ数、施設および選手の競技能力などにおいて、日本とは大きく異なることが示唆された。さらに指導者は異文化において、それぞれの時期に様々なストレスを抱えることが明らかとなった。

第3章では、ブータン同様、アジア貢献事業の対象国のスタッフ数や施設といったコーチング環境は、日本とは大きく異なることが明らかになった。

第4章では、指導者の異文化適応過程は、キャリア形成プロセスの4段階サイクルに基づいて捉えることができた。

以上をもとに、結論では、海外派遣サッカー指導者は、日本とは大きく異なるコーチング環境から多くのストレスに直面していた。そのストレスに対して、もがき苦しむ中でレジリエンスを発揮し、乗り越えていることが分かった。本研究ではこれまで明らかにされてこなかった海外派遣サッカー指導者のコーチング環境の実態と、そこでの心理的変容過程が明らかとなった。この知見はアジア貢献事業のみならず、異文化における心理的適応過程の解明にも繋がると思われる。

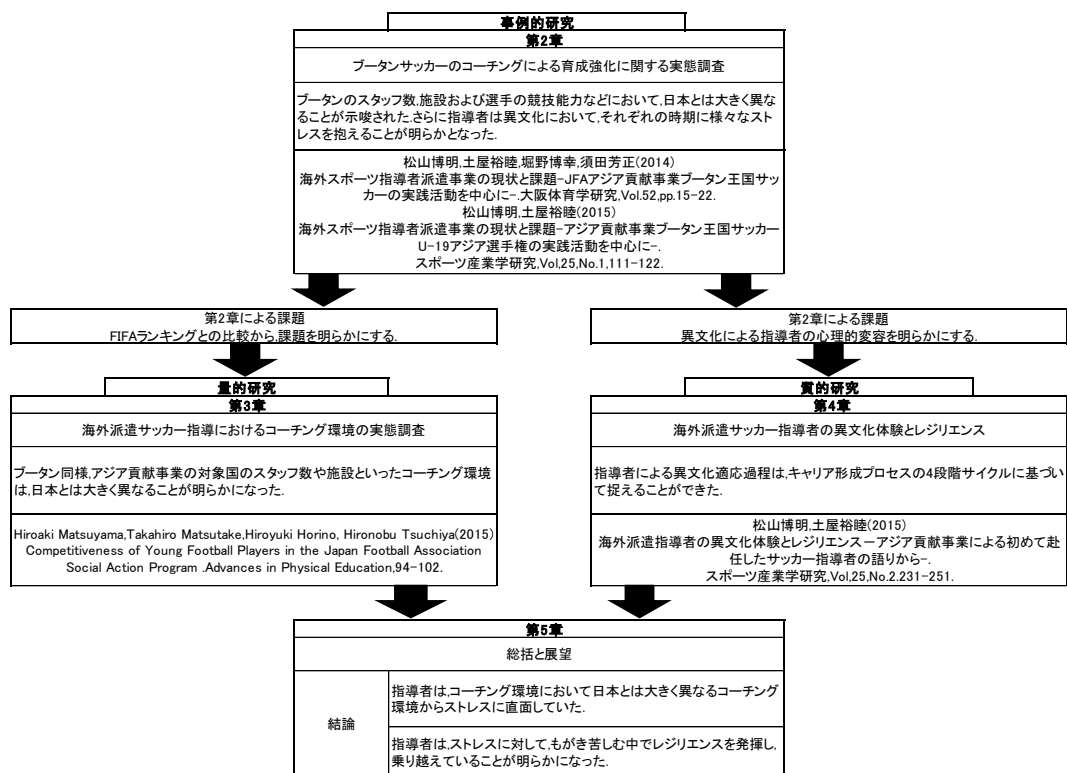


Figure5-1 本研究の構成の要約

5.2. 量的研究と質的研究の有用性

本研究の研究手法としては、量的研究と質的研究の両方が考えられた。

第3章のブータン以外の国のコーチング環境の実態を把握するために、FIFA ランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行った。この研究は、質問紙の調査といった統計処理によりデータを平均化する量的研究によって、より具体的な提案が可能になった。

一方で、本研究の第2章は、海外派遣サッカー指導者の体験をつぶさに記述するため、ブータンにおける約1年半にわたるコーチング記録をもとに、コーチング環境の実態を明らかにする研究であった。この研究は、コーチング環境の実態を明らかにする研究であり、ケースの分析から普遍的な法則性を見出そうとする手法で、実践で多く採用される方法である。したがって、質的な事例的研究手法が有効的であった。

また、第4章の質的研究の中で、サッカー指導に関するインタビュー調査に基づく質的研究によって、海外派遣サッカー指導者の心理的変容のプロセスを把握することに繋がった。インタビュー調査は半構造化された形で行い、質問の聞き方を変えるなど工夫しながら海外赴任時の思考を尋ねたことで、一度の質問では出てこなかった

回答も引き出すことが出来る。また、語りの言語データを利用して、レジリエンスの体験を取り上げた。その場合、指導者の赴任先での個々の事例の生のありようを出来るだけ損なわないで記述することが出来る。TEMを用いて、それらを可視化した。そのことによって第4章における質的研究が大きな役割を果たしたと言える。

したがって、海外派遣サッカー指導者のコーチング環境の特徴を明らかにした。同時にそこで指導者が体験する異文化での心理的変容過程を探求するために、量的研究と質的研究の両方の利点を生かした研究方法を選択し、研究の課題を論証し立証していく手法が有効的であった。

5.3. 海外派遣サッカー指導者の有用性

結論では、第2章から第4章までの間、海外派遣サッカー指導者は、日本とは大きく異なるコーチング環境から多くのストレスに直面していた。そのストレスに対して、もがき苦しむ中でレジリエンスを発揮し、乗り越えていることが分かった。

2章から3章では、海外派遣サッカー指導者の赴任先の国は、日本と比較して、コーチング環境や選手の競技能力で劣っていた。そのことによって、日本では、普段から当たり前と考え、実施していたことが、赴任先では全く機能しないことによる心理的ストレスが大きくなったと考えられる。FIFA ランキング下位の国で指導している海外派遣サッカー指導者は、日本と異なるコーチング環境や選手のレベルや意識が低いため、そのことを自分でコントロール出来る範囲内のものとして認めることができない状態になると考えられる(カレン・ライビッチら, 2015)。また、海外派遣サッカー指導者は、直面している困難に直視できず、環境面や選手などの他者的な責任転嫁に陥りやすく、状況に対する不満は、怒りに結びつく傾向にあると考えられる(石田ら, 2013)。こうした状況の中で、指導者は、如何にマイナス思考を断ち切って、気持ちの切り替えを行うことである(横井, 2014)。また、家族や友人とのコミュニケーションによって、早期に立ち上がるために必要な存在だと考えられる(久世, 2014)。

また、指導者にとって日本と異なるコーチング環境の中で創意工夫をすることは、指導力向上のために、非常に重要であると考えられる。松山(2010)は、トレーニング用具が現地で調達できなかったため、ロープを買ってきて、ラダーを作ることや古い机を改良して、ミニゴールを作るなどして対応したと述べている。バングラデシュ国立スポーツ学院で指導している松原啓氏によると、グラウンドが確保できなかったため、空き地や田んぼを利用して、サッカーの普及活動を行っていると述べている(JFA, 2010a)。バングラデシュでコーチに赴任した山口敬宣氏も、海外派遣サッカー指導者として、赴任先の

指導者と共に、与えられたコーチング環境の中で、いかに工夫しながら、コーチ自身が成長することだと述べている(JFA, 2012b).

イビチャ・オシムは、指導者自身が勉強することである。また、自分が指導している選手に対応しているかが重要であると述べている(JFA, 2010b)。そのためには、指導者がより良いトレーニングをする努力、最終的には、全ては、指導者の「意識」にかかっていると見える(JFA, 2010b)。

このように、海外派遣サッカー指導者は、日本と全く違う過酷で厳しいコーチング環境下において、指導していく必要がある。しかしながら、海外派遣サッカー指導者は、日本とは異なる指導環境だからこそ独自の創意工夫と適応能力を身に付けることによって指導力向上に繋がることが示唆された。

5.4. コーチング環境への提言

本研究の序章から第4章のコーチング環境において検討した知見をもとに以下のような示唆が得られた。

FIFAランキング下位の国には、アカデミーの施設を整備し、優秀な選手が常に参加出来る環境を整え(Bert van Lingen, 2003), U-12, U-15, U-18の3カテゴリーを編成し、各地域でのサッカーの普及活動と試合環境の改善を行うことである(JFA, 2007d)。

各地域でのサッカーの普及活動に関しては、FIFAランキング下位の国は、地域と学校の部活動との連携を充実させた総合型地域スポーツクラブ(以下:総合型クラブとする)(注1)の方法を学び、地域と学校の部活動との連携を充実させる方法が考えられる。また、FIFAランキング下位の国は、各学校にサッカー経験者を体育教師として派遣し、サッカー協会主催のグラスルーツ(注2)・コーチングスクールに定期的に参加出来る環境を整えることである。そのことで、指導者は、共通理解と指導力向上を図ることが出来る。日本の例を挙げると、熊本県宇城市にあるJFAアカデミーは、近隣の学校に所属している選手に参加させ、地域の理解と活性化を図っている(JFA, 2013a)。また、伊藤(2005)によると、フランスやイングランド、オーストリアの選手育成制度において、学校とアカデミー、地域との連携によって強化育成がなされているなどの成功事例が述べられている。

試合環境の改善に関しては、FIFAランキング下位の国は、育成年代からのシステム構築には学校体育の中でサッカーの強化を行ってきた日本のように、学校体育での一貫指導の充実を図ることを提案する。例えば、ブータンの学校には、グラウンドが整備されてきており、それ自体は基本的に「無償」で運営されている(松岡ほか, 2012)。このことから、FIFAランキング下位の国は、学校体育での一貫指導の充実を図る目的として、スクール大会にリーグ戦方式を地域と協

力して導入し、試合を多く取り入れる必要がある(松山ら, 2014)。その国の大会にリーグ戦を導入することによって、より多くの試合環境を作り出すことが出来る。また、試合で選手と指導者が、リーグ戦によって、改善とチャレンジする機会を与えることが出来る(JFA, 2011d)。また、FIFA ランキング下位の国が、より多くの国外強化遠征による豊富な国際経験を積むために、近隣諸国との親善試合を積極的に行うことが望ましい。そのためには、友好関係にあるサッカー協会や JFA などに資金的な援助も含めて、大会前のトレーニングや多くの国際大会の機会を要請する必要がある。

5.5. 本研究の限界と今後の課題

5.5.1. 指導者派遣の検討

本研究の第4章までに海外派遣サッカー指導者の本研究の限界と今後の課題において、検討した知見をもとに以下のような示唆が得られた。

現在、JFAは、2006年から一部をJICA(2014)が行う青年海外協力隊やシニアボランティアなどの事業と提携して実施している(JFA, 2013)。JICA(2014)は、円滑な国際協力に欠くことのできない実務に携わる特定の分野や課題について、国際協力の現場で必要となる知識やスキルの向上を目的とした赴任前研修などを実施している。JFAとJICAの事業と提携して実施した指導者は、このような研修を受けることが可能になった。そこで、海外派遣サッカー指導者は、海外赴任の異文化やリーダーシップおよび健康管理教育などのプログラム(ピースマインド・イーブ株式会社, 2014)の内容を赴任前の指導者の研修に取り入れることを提案する。

5.5.2. 赴任後の日本での指導先の検討

本研究からアジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者の検討した知見をもとに以下のような示唆が得られた。

帰国した海外派遣サッカー指導者は、その後、就職先の岐路としてアジア貢献事業の継続もしくは日本での指導を選択する岐路になる。海外派遣サッカー指導者の多くが、満足感や自信を感じ取ることが出来た。その結果、海外派遣サッカー指導者は、ポジティブな変化の体験をしたと考えられ、その後も海外派遣サッカー指導者を継続する意思があった。

一方で、海外派遣サッカー指導者を継続する意思があった指導者の中には、日本の就職先が困難であると予想したため継続することになった指導者も存在した。

このことから、海外派遣サッカー指導者が、赴任先では、日本サッカーの有益な情報が限られ、日本で派遣の様子が報道される機会が少なくなる。その結果、日本での海外派遣サッカー指導者の存在感が薄れ、日本で活躍出来る指導チャンスが失われてしまうことが考えられる。したがって、海外派遣サッカー指導者が、海外派遣されている期間であっても、日本の十分な情報交換が出来るシステムを構築する必要がある。

注

注 1) 総合型クラブとは、初心者からトップレベルの競技者が集い、地域住民のだれもが集い、それぞれが年齢、興味、関心、体力、技術、技能レベルなどに応じて活動出来るクラブである。また総合型クラブは、住民全体の運営により、すべての世代の人々が近隣の学校の公共のスポーツ施設を活用しながら、生涯を通してスポーツを楽しめる環境づくりを目指すことである(佐藤ら, 2010)。

注 2) グラスルーツとは、草の根、民衆の、と言った意味があり、どこでもだれでも皆が関わってプレーされるものである。グラスルーツサッカーは、すべての年齢、性別、サイズ、姿、レベル、国籍、信仰、人種、すべての人たちのためにあるとした。また、グラスルーツは、トップレベルサッカーを支えるものであり、その国のサッカー文化の厚さとなるものである。したがって、グラスルーツは、世界的に非常に大切にされ、組織的な取組が各国で始まっている(JFA, 2014c)。

引用文献

- 安部久貴・落合 優(2012)サッカー指導者の選手に対する期待と声かけの関係性. 学校教育学研究論集, Vol. 26, 55-67.
- AFC チャレンジカップ 2012 予選大会.
<http://www.ja.wikipedia.org/wiki/>(参照日:2013年6月10日).
- 會田 宏(1994)ボールゲームにおける戦術の発達に関する研究. スポーツ運動学研究, 25-32.
- 阿久津洋巳・小田島裕美・宮 聡美(2008a)ストレス課題によるポジティブ感情とネガティブ感情の変化. 岩手大学教育学部研究年報, Vol. 68, pp. 1-8.
- 阿久津洋巳(2008b)ポジティブ感情とネガティブ感情の測定-項目反応理論の適応-. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, Vol. 7, 135-144.
- 浅岡正雄(2000)スポーツの戦術とは何か. 体育教育, Vol. 10, 38-41.
- Bangsbo, J. :長谷川 裕, 安松幹展, 上田滋夢 訳(2008)ゲーム形式で鍛えるサッカーの体力トレーニング. 大修館書店:東京, pp. 8-54.

- Bert van Lingen(2003)COCHEN VAN JEUGDVOETBALLERSTAISHUKAN
PUBLISHING COMPANY:TOKYO, pp. 204-205.
- ビル・ベスウィック:石井源信,加藤 久 訳(2006)サッカーのメンタル
トレーニング.大修館書店:東京, pp. 82-132.
- Bridges,W. (1980)Transitions.Reading:Addion-Wesley.
- クリス・アンダーセン・デイビット・サリー:児島修 訳(2014)サッ
カーデータ革命.辰巳出版:東京, pp. 159-202.
- Cicchetti and Garmezy,N(1993)Special issue: Prospects and
promise in study of resilience.Development and
Psychopathology.Vol. 5, No. 4, 497-502.
- Csanádi,Árpád(1978)Soccer:technique-tactics-coaching. by
Árpád Csanádi ; [translated by István Butykai and Gyula
Gulyás ; translation revised by Charles Coutts]Sport
Shelf,printing.
- Downey,M. (1999)Effective Coaching.London:Orion.
- 遠藤保仁(2011)信頼する力.角川書店:東京, pp. 88-94.
- エリッヒ・バイヤー:朝岡正雄 訳(1993)スポーツ科学辞典.大修館書
店:東京, p. 418.
- FIFA(<http://www.fifa.com/> (参照日:2014年11月28日)).
- Folkman,S. (1997)Positive Psychological states and coping with
severe stress.Social science and Medicine,Vol. 45, 1207-1221.
- ガブリエル・ロドリゲス(2009)ジュニアサッカー世界の育成術.ベー
スボールマガジン社:東京, pp. 80-88.
- グロ・ビザンツ・グンナー・ゲーリッシュ:田嶋幸三 訳(1997)指導
者のためのサッカー教科書.ベースボールマガジン社:東
京, pp. 27-47.
- 橋本泰子・安間翔太(2008)大学生のレジリエンスに関する一考察.
桜美林大学臨床心理センター年報, Vol. 6, 19-36.
- 林 晋子・土屋裕睦(2012)オリンピックが語る体験と望まれる心理サ
ポートの検討-出来事に伴う心理変化と社会が与える影響に着目
して-.スポーツ心理学研究, Vol. 39, No. 1, 1-14.
- 平山修一(2008)ブータンの歴史.明石書店:東京, pp. 3-6.
- 堀 正(2009)コーチング心理学の展望.群馬大学社会情報学部研究論
集, Vol. 16, 1-12.
- 堀野博幸(2009)トップレベルコーチのコーチングモデルに関する研
究-イングランドサッカーにおけるマネージャーの事例研究-.
スポーツ科学研究, Vol. 6, 1-16.
- 藤岩秀樹(2013)サッカーゲームにおける得点傾向の分析.尾道市立
大学経済情報論集, Vol. 13, No. 1, 177-186.
- 市村操一(1965a)あがる心理・あがらない心理.児童心理

Vol. 19, No. 5, pp. 115-119.

- 市村操一(1965b)スポーツにおけるあがりの特性の因子分析的研究
(1). 体育学研究, Vol. 30, No. 2, 18-22.
- 今村律子・山本勝昭・出水 忠・徳島 了・谷川知士・乾 真寛(2013)
学生アスリートのレジリエンス傾向:S-H レジリエンス尺度から
みたレジリエンス能力の検討. 福岡大学スポーツ科学研究,
Vol. 43, No. 1, 57-69.
- 乾 真寛(1996)1995 ユニバーシアード福岡大会におけるサッカー代
表チーム優勝の勝因に関する一考察. 日本体育学会, Vol. 47, 490.
- 石田 淳・白戸太朗(2013)挫けない力. 清流出版:東京, pp. 70-102.
- 石井源信・石川国広・後藤 肇・高見和至(1997)アトランタオリンピ
ック監督・コーチの実態調査(1)代表決定から解団式までのスト
レス要因について. 日本体育学会大会号, Vol. 48, 537.
- 石井源信・石川国広・後藤 肇・高見和至(1999)指導者のストレスマ
ネジメントに関する調査研究ー長野冬季オリンピック出場の監
督・コーチを対象としてー. 日本オリンピック委員会スポーツ医・
科学研究報告書, Vol. 3, 3-20.
- 伊藤 壇(2011)越境フットボーラー. 角川書店:東京, pp. 59-65.
- 伊藤庸夫(2005)ヨーロッパに於けるフットボール・エリート選手育
成制度と学校との関係. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要,
Vol. 2, 15-28.
- JFA(2006)JFA テクニカルレポート. 2006 FIFA World Cup Germany.
サンメッセ:東京.
- JFA(2007a)Technical news, Vol. 21. サンメッセ:東京, pp. 44-45.
- JFA(2007b)サッカー指導教本 2007. サンメッセ:東京, pp. 10-86.
- JFA(2007c)Technical news, Vol. 19. サンメッセ:東京, pp. 40-41.
- JFA(2007d)育成年代のゲーム環境に関するガイドライン, アサヒビ
ジネス:東京, pp. 2-7.
- JFA(2009a)Technical news, Vol. 31. サンメッセ:東京, pp. 42-43.
- JFA(2009b)Technical news, Vol. 34. サンメッセ:東京, p. 45.
- JFA(2010a)Technical news, Vol. 39. サンメッセ:東京, pp. 18-45.
- JFA(2010b)U-12 指導指針 2010. アサヒビジネス:東京, pp. 4-6.
- JFA(2011a)Technical news, Vol. 45. サンメッセ:東京, pp. 44-45.
- JFA(2011b)Technical news, Vol. 43. サンメッセ:東京, pp. 22-23.
- JFA(2011c)Technical news, Vol. 44. サンメッセ:東京, pp. 44-47.
- JFA(2011d)JFA news 2011 5月情報号. No. 325, JFA 機関紙, pp. 4-6.
- JFA(2012a)Technical news, Vol. 49. サンメッセ:東京, pp. 42-43.
- JFA(2012b)Technical news, Vol. 51. サンメッセ:東京, pp. 42-43.
- JFA(2013a)JFA PLOFILE. サンメッセ:東京, pp. 1-26.
- JFA(2013b)Technical news, Vol. 56. サンメッセ:東京, pp. 38-39.

- JFA(2013c) Technical news, Vol. 58. サンメッセ:東京, p. 43.
- JFA(2014a) Technical news, Vol. 60. サンメッセ:東京, pp. 42-43.
- JFA(2014b) Technical news, Vol. 61. サンメッセ:東京, pp. 42-43.
- JFA(2014c) JFA テクニカルレポート. サンメッセ:東京, p. 9.
- JFA 公認指導者の海外派遣. <http://www.jfa.or.jp/>
(参照日:2013年6月10日/2015年3月20日).
- JICA(2010) ブータン王国 貧困プロフィール調査(アジア)最終報告書. OPMAC:東京, pp. 1-14.
- JICA(2014) 国際協力人材赴任前研修の概要・カリキュラム. 国際協力機構:東京, pp. 1-10.
- JOC(2014) スポーツ指導者海外研修事業平成25年度帰国者報告書. 公益財団法人日本オリンピック委員会:東京, pp. 55-87.
- ジョン・ジアニーニ:石村宇佐一, 鈴木 壮 訳(2012) バスケットボールの“コートセンス”. 大修館書店:東京, p. 76, p. 250
- J. ヴァインエック:八林秀一 訳(2002) サッカーの最適トレーニング. 三松堂印刷:東京, pp. 12-15.
- 金井壽宏(2010) キャリアの学説と学説のキャリア. 日本労働研究雑誌:東京, Vol. 52, No. 10, 4-15.
- 金本めぐみ, 横沢民男, 金本益男(2002) 「あがり」の原因帰属に関する研究. 上智大学体育, Vol. 35, 30-40.
- カレン・ライビッチ・アンドリュウ・シャテー(2015) レジリエンスの教科書. 草思社:東京, pp. 14-147.
- 加藤 久・福林 徹・大森一伸・山本利春・矢野雅和・西嶋尚彦・尾山末雄・吉田優子(1994) サッカーがうまくなるためのからだづくり. 大日本印刷:東京, pp. 130-142.
- 加藤 敏・八木剛平(2009) レジリアンス 現代精神医学の新しいパラダイム. 金原出版:東京, p. 9.
- 川喜田二郎(1967) 発想法-創造性開発のために-. 中公新書:東京, pp. 66-114.
- 河村美樹(2014) 日本サッカーが世界一になるための26の提言. 文藝春秋:東京, pp. 194-199.
- 河村茂雄(2000) 心のライフライン-気づかなかった自分を発見する-. 誠信書房:東京, pp. 5-12.
- 北村勝朗(2004) 「教育情報」の視点による「コーチング」論再考 : ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として. 教育情報学研究, Vol. 2, 71-80.
- 国際コーチ連盟日本支部
<http://www.icfjapan.com/whatscoaching/code-of-ethics>
(参照日:2015年11月15日)
- 小鳥居伸介(2012) 「持続可能な開発」論の可能性-「幸福立国」ブー

- タンの事例から-。長崎外大論叢, Vol. 16, 59-72.
- KRNEWS 洪明甫, 池田誠剛 コーチの国境を越えた友情. <http://www.krnews.jp>(参照日:2014年2月15日).
- 久世浩司(2014)レジリエンスの鍛え方. 大日本印刷:東京, pp.166-202.
- Lazarus, R. S.(1966) Psychological stress and the coping process, New York:Mcgraw-Hill.
- 李宇諤・西條修(2006)ユース年代における日・韓のサッカー指導者の資質に関する比較研究. 日本体育大学紀要, Vol. 36, No. 1, 77-88.
- マルセロ・ロフェ:今井健策 監修(2008)サッカーメンタル教科書. 大日本印刷:東京, pp. 25-27.
- 真島真里(1995)学習動機づけと「自己概念」東洋(編)現代のエスプリ 333. 意欲-やる気と生きがい-. 至文堂:東京, pp. 123-137.
- 松原英樹・入口豊・中野尊志・西田裕之・中村泰介(2006)フランスの青少年システムに関する研究(I). 大阪教育大学紀要, Vol. 4. No. 55, 51-70.
- 松本直也(2011)U-21 日本代表サッカーチームにおけるトレーニング方法と得点経過について:第5回東アジア競技大会(2009/香港). 桃山学院大学人間科学, Vol. 40, 43-63.
- 松岡重信・中嶋裕子・古達貴(2012)アジアの開発途上国・地域における教育システムの研究(2)-特にブータン王国の体育教育の現状を中心に-. 福山平成大学福祉健康研究, Vol. 7, 103-112.
- 松瀬学(2004)メディアのオリンピック-肥大化する商業五輪 IOC, テレビパワー, 広告代理店の功罪とは(特集 オリンピックの記憶と幻想)-. 現代スポーツ評論, Vol. 10, 20-33.
- 松山博明(2010)JFA news No. 319, サンメッセ:東京, p. 71.
- 松山博明・土屋裕睦・堀野博幸・須田芳正(2013)ブータン王国サッカーのコーチングに関する調査研究-U-19 代表チームにおける強化トレーニング内容の観点から-. 大阪体育学研究, Vol. 51, No. 3, 28.
- 松山博明・土屋裕睦・堀野博幸・須田芳正(2014)海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題-JFA アジア貢献事業ブータン王国サッカーの実践活動を中心に-. 大阪体育学研究, Vol. 52, pp. 15-22.
- 松山博明・堀野博幸・須田芳正・中村泰介・関口潔・土屋裕睦(2015a)プロサッカーチームのシーズンにおけるトレーニング頻度. 大阪成蹊大学マネジメント編紀要, Vol. 1, 90-95.
- 松山博明・土屋裕睦(2015b)海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題-アジア貢献事業ブータン王国サッカーU-19 アジア選手権の実践活動を中心に-. スポーツ産業学研究, Vol. 25, No. 1, 111-122.

南アジアサッカー選手権 2011

<http://www.ja.wikipedia.org/wiki/>(参照日:2013年6月10日).
文部科学省(2013)スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議報告書. 文部科学省:東京, pp. 12-13.

長澤純一(2007)体力とは何かー運動処方その前にー. ナップ:東京, pp. 8-9.

永都久典・田嶋幸三(1991)サッカーの指導者及び指導内容に関する比較研究:旧西ドイツと日本について. 城西大学研究年報, 自然科学編. Vol. 15, 47-62.

内藤翔平・入口 豊・井上功一・中野尊志・大西史晃(2013)イングランドのサッカークラブにおけるユース育成について(1)イングランドのユース育成システム. 大阪教育大学紀要, Vol. 61, No. 2, 11-24.

直井 愛(2010)スポーツと多文化心理学, 近畿大学臨床心理センター紀要, Vol. 3, pp. 129-132.

根本かおる(2012)ブータン「幸福な国」の不都合な真実. 河出書房新社:東京, pp. 78-107.

Nicholson, Nigel and Michael West(1988) Managerial Job Change: Men and Women in Transition. Cambridge University Press, 1989. "Transition, work histories, and careers." In Arthur, Michael B., Douglas T. Hall, and Barbara S. Lawrence eds. Handbook of Career Theory, Cambridge University Press, 181-201.

Nicholson, Nigel(1990) "The transition cycle: Causes, outcomes, processes and forms. In Shirley Fisher and Cary L. Cooper eds., On the Move: The Psychology of Change and Transition, Chichester, UK.: John Wiley & Sons, 83-108.

新村 出(2008)広辞苑. 岩波書店, p. 973.

西 政治(2008)日本サッカーにおける育成期一貫指導の重要性と課題.ー世界に通用する選手育成ー. 京都学園大学経営学部論集, Vol. 18, No. 1, 173-196.

大野 裕(2014)こころの力の育て方-レジリエンスを引き出す考え方のコツ-. きずな出版:東京, pp. 100-102.

岡野憲一郎(2009)新外傷性精神障害-トラウマ理論を越えて-. 岩崎学術出版社:東京, p. 219.

岡澤祥訓(2009)競技力向上のためのメンタルサポート, 卓球のメンタルサポート. 臨床スポーツ医学:東京, Vol. 26, No. 6, 651-654.

小野 剛(2002)ユースサッカー, 最新サッカー百科大事典. 大修館.

小野 剛(2010)サッカープレーヤーズレポート, カンゼン:東京, pp. 226-230.

- Parsloe, E. (1995) *Coaching, Mentoring, and Assessing: A practical guide to developing competence*. New York: Kogan Page.
- ピースマインド・イーブ株式会社 (2014) レジリエンス ビルディング 「変化に強い」人と組織のつくり方. 日経印刷: 東京, pp. 140-153.
- Posttraumatic growth: positive change in the aftermath of crisis
Richard G. Tedeschi, Crystal L. Park, and Lawrence G. Calhoun (1998) Psychology Press.
- レイナー・マートン: 大森俊夫, 山田茂 訳 (2013) スポーツ・コーチング学. 三報社印刷: 東京, pp. 189-201.
- SAMURAI×TPL タイリーグに行こう. <http://www.tplip.net/> (参照日: 2014年2月14日).
- 佐藤 梓・仲野隆士 (2010) 総合型地域スポーツクラブと学校運動部の連携に関する研究ー東北地方における競技力向上を視野に入れたクラブを事例としてー. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, Vol. 11.
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法ー原理・方法・実践. 新曜社: 東京, pp. 157-165.
- 佐藤浩一 (1998) 「自伝的記憶」研究に求められる視点. 群馬大学教育学部紀要, Vol. 47, 599-618.
- 佐藤 俊 (2011) 越境フットボーラー. 角川書店: 東京, pp. 59-65.
- サトウタツヤ (2009a) TEM ではじめる質的研究ー時間とプロセスを扱う研究をめざしてー. 誠信書房: 東京, pp. 33-54.
- サトウタツヤ (2009b) TEM でわかる人生の経路ー質的研究の新展開ー. 誠信書房: 東京, pp. 2-28.
- 佐藤慶明 (2014) 体育授業のためのサッカーテキスト (基本技術編 3), 大阪産業大学人間環境論集, Vol. 13, 161-165.
- Schein, Edgar H. (1975) "How career anchors hold executives to their career paths," *Personnel*, Vol. 52; 11-24. *Career Anchor: Discovering Your Real Values*. San Diego, CA: Pfeiffer, 1990.
- 渋谷 崇行 (2010) レジリエンスと子どもの成長, 体育の科学, Vol. 60, No. 1, pp. 33-37.
- 下野 淳子 (2013) 海外赴任のために必要なこと. 角川学芸出版: 東京, pp. 2-3.
- Simpson, A. J., & Weiner, E. S. (Eds.). (1989) *The Oxford English Dictionary* (2nd ed., Vol. 3). Oxford: Clarendon Press.
- 曾根純也 (2008) シリア U-17 代表チームの戦略・戦術的活動に関する研究. 大阪体育大学紀要, Vol. 39, 37-38.
- Sportsnavi FC ソウルの躍進を支える日本人の存在. <http://m.sports.yahoo.co.jp/column/detail/201308200006-spnavi> (参照日: 2014年2月14日).

- 杉山哲司(2012)現場で生きるスポーツ心理学.杏林書院:東京,pp.13-42.
- Summers,D.(Ed.)(2009)Longman Dictionary of Contemporary English(5ed.).Essex:Pearson Education.
- スチュアート・バクスター(1996)勝つための組織力.講談社:東京,pp.105-115.
- 鈴木茂廣・坂田勇夫(1995)海外遠征選手の心理的側面に及ぼす影響について.日本体育学会,Vol.50,505.
- 田嶋幸三(2001)The Football Conference Japan2001・茨城:東京,pp.12-39.
- 高橋義雄・佐々木 康(2012)日本スポーツ選手の海外移動とキャリア形成に関する一考察.生涯学習・キャリア教育研究,Vol.8,71-78.
- 高畑好秀(2008)勝負を決めるスポーツ心理学,美研プリンティング株式会社:東京,pp.94-95.
- 高見和至・後藤 肇・石井源信・石川国広(1997)トランタオリンピック監督・コーチの実態調査(2):現場の指導者はオリンピックに何が必要と感じているか.日体育学会大会,Vol.48,538.
- 高見和至・石井源信・石川国広・後藤 肇(1999)オリンピック監督・コーチのストレスに関する実態調査アトランタ五輪の指導者の感じたストレスと今後の提言.体育の科学,Vol.49,67-74.
- 高比良公成(2009)幸福王国ブータンの知恵.リヨン社:東京,pp.138-141.
- 田村さつき・池澤直美(2013)アジア海外就職.さんこう社:東京,pp.206-214.
- The Asian Football Confederation(2012)AFCU-19CHAMPIONSHIP.
<http://www.the-afc.com/en/afc-u19-championship-previous-results/afc-u19-championship-results-standings-2012.html>
 (参照日:2014年7月31日)
- 友松 篤(2012)グローバルキャリア教育-グローバル人材の育成-.ナカニシヤ出版:東京,pp.3-15.
- 戸塚 啓(2010)世界基準のサッカーの戦術と基準.今屋印刷:東京,pp.184-189.
- 豊田則成(2012)アスリートのキャリアトランジションに伴う発達モデルの質的検討,科学研究費助成事業研究成果報告書,pp.1-4.
- テューダー・ボンパ:尾懸 貢,青山清英 訳(2006)競技力向上のトレーニング戦略.大修館書店:東京,pp.38-55.
- 湯浅健二(2000)サッカー監督という仕事,新潮社:東京,pp.43-49.
- 上淵 寿・川瀬良美(1995)達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学.金子書房:東京,pp.187-215.
- Valsiner,J and Sato,T(2006)Historically Structured

- Sumpling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the historical nature of cultural psychology In Straub, J., Klbl, C., Weidemann, D. and Zielke, B. (Eds.) "Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology", transcript Verlag, pp. 215-251.
- Van Yperen, N. W. (2003) On the link between different combinations of negative affectivity (NA) and positive affectivity (PA) and job performance. *Personality and Individual Differences*, Vol. 35, 1873-1881.
- 若松和紀 (2013) 図解トレーニングの基礎理論. 西東社: 東京, pp. 184-193.
- Watson, D. Clark, L. A & Tellegen, A. (1988) Development and validation of brief measures of Positive and Negative Affect: the PANAS scales, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 54, 1063-1070.
- Weiner, B. (1972) *Theories of motivation: From mechanism to cognition*. Markham.
- Whitmore, J. (1992) *Coaching for Performance*. London: Nicholas Brealey.
- 山口昭男 (2008) 広辞苑. 岩波書店: 東京, p. 2773.
- 山崎勝之 (2006) ポジティブ感情の役割-その現象と機序-. *パーソナリティ研究*, Vol. 14, 305-321.
- 安田裕子 (2005) 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程-治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から-. *質的心理学研究*, Vol. 4, 201-226.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012) TEMでわかる人生の経路-質的研究の新展開-. 誠信書房: 東京, pp. 34-45.
- 横井朋幸 (2014) 世界は僕らの挑戦を待っている. 角川学芸出版: 東京, pp. 141-142.
- 吉村允男 (2007) 精神的健康とレジリエンスおよび自己開示との関連. *臨床教育心理学研究*, Vol. 33, No. 1, 73.
- Yoshimura, M. and Hasagawa, N. (2002) A STUDY ON TACTICS OF ATTACK IN FOOTBALL GAME. 7th Annual Congress of the European College of Sport Science, Vol. 1, 461.